

Title	エラスムス『対話集』：敬虔な午餐会
Author(s)	金子, 晴勇訳注解
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No. 45
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2021
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

エラスムス『対話集』 敬虔な午餐会

金子 晴勇 訳・注・解説

対話の出席者 エウセビウス、ティモテウス、テオフィリウス、クリソグロットウス、ウラニウス、

その他に影武者としてソフロニウス、エウラリウス、ネファリウス、テオディダクトウス、

給仕のボーイ

エウセビウス いま田園はことごとく若葉にみち、ほほえみかけているのに、すすけた都会を好む人々がいるとは、全く驚いてしまう。

ティモテウス すべての人が花々や青々と繁る草原や泉や小川の光景を見て魅せられるわけではない。たとえ彼らが魅せられるとしても、何か別のものが彼らをもつと喜ばすにちがいない。こうして針が釘によつて押し出されるように、⁽¹⁾ 快楽が快楽により押し出されて取つて替わるのです。

エウセビウス 君は恐らくわたしに高利貸しか、⁽²⁾ あるいはそれと同類の貪欲な商人のことを話しているのでしょうか。ティモテウス たしかにそういう人たちのことです。しかし、よき友よ、彼らだけではない。いな、彼らのほかに無数の人たちがいて、その中には司祭らや修道士たちまで入っているのです。彼らはいかに利得のために都会に滞在す

る方を選びます。しかも最も大勢の人が集まっている都会を選びます。彼らはピュタゴラスやプラトンの教説に従うのではなく、群がる人々に囲まれるのが好きだった目の見えない乞食のような人の教説に従っています。というのはその人は、民衆の集まっているところには利得もちがいもある、ときつと言うでしょうから。

エウセビウス 盲人たちはその利得ともども立ち去るがよい。わたしたちは哲学者なのだ。

ティモテウス 哲学者ソクラテスもまた田園よりも都会を好みました。というのは彼は学ぶことに熱心で、都会は彼に学ぶ機会を与えていたからです。実際、田園には樹木や庭園、泉や小川があつて、目を楽しませてくれますが、そのほかには何も語ってくれないし、同じく何も教えてくれない（と彼は言うでしょう⁽³⁾）。

エウセビウス 君がただひとり田園を歩き回っているならば、ソクラテスの言つたことも、多少意味がある。しかしながら、わたしの意見をいわせてもらえば、事物の存在というものは黙しているわけではなく、いたるところでわたしたちに語りかけ、注意深くかつ聞く耳のある人に出会うときには、観察している者に多くのことを教えてくれます。若葉に燃えているあの自然のかくも魅力的な表情は、自然の創造者なる神の知恵が彼の善良さに等しいということ以外のを告げているでしょうか⁽⁴⁾。だが、ソクラテスはあの憩の場〔木蔭〕にしりぞいて弟子のパイドロスに何と多くのことを教え、さらにまた彼から何と多くのことを学んでいることか。

ティモテウス もしそのような人たちが二、三人でも集まっていたとしたら、田舎の生活よりも魅力的なものはあり得ないでしょう。

エウセビウス それでは、それを試してみる気はありませんか。わたしは市の郊外に大きくはないが、よく手入れしてある農園をもっています。そこへ明日あなたがたを食事にご招待いたしましょう。

ティモテウス わたしたちは大勢いますよ。ですから、あなたの農場をみな食いつくしてしまうでしょう。

エウセビウス いいえ、食事として出されるものはことごとく野菜でして、ホラティウスの言うように、「買い求めら

れたのではないのです⁽⁵⁾。土地そのものがワインを供給してくれます。樹々が自分でトウナス、メロン、イチジク、ナラ、リンゴ、クルミのほとんどを与えてくれます。それはあたかも、もしわたしたちがルキアノスの言うことを信じるなら、幸福の島で起っているかのようです⁽⁶⁾。おそらくわたしたちは家畜を飼っているところからニワトリ（メンドリ）を一羽おまけに与えられるでしょう。

ティモテウス それでしたら、お断りすることもありません。

エウセビウス なおまた、各自自分の欲する招かれていないお客を連れてきてください。そうすればあなたがたは現在四人いるのですから、ムーサの女神たちと同じ数になるでしょう⁽⁷⁾。

ティモテウス そういたしましょう。

エウセビウス あなたがたに前もって注意申し上げておきたいことが一つのあります。それは各自が自分の薬味をご持参下さることです。わたしの方ではただ食物を準備するだけです。

ティモテウス どのような薬味のことを言っておられるのですか。コシヨウですか、それとも砂糖でしょうか。

エウセビウス いいえ、もつとつまらないものですが、もつとおいしいものです。

ティモテウス いったい何んなのでしょうか。

エウセビウス 食欲（空腹）です⁽⁸⁾。今日の食事を軽くとっておきさえすれば、それはかなえられます。明日すこし散策するとお腹がすいてきます。またこのような散策の便宜をわたしの田舎の生活が提供するでしょう。ところで食事は何時ごろがよろしいのですか。

ティモテウス 十時頃、太陽が昇ってあまり暑くならない方がいいです。

エウセビウス そのように準備いたしましょう。

「ボーイ、ご主人さま、お客さまがたが門のところにお着きです」

エウセビウス　ほんとうによくお出で下さいました（約束どおりこられましたね）。すこし早めに、それぞれ一番お気に入りになりたいへんすてきなお客様をお連れになっておいで下さったことに重ねて感謝いたします。遅れてやって来て午餐会の主催者をいらだたせるような不作法なお客もおりますから。

ティモテウス　わたしたちはこのあなたの王様のような荘宅を訪ねて検分するひまをもちたいと思つて、すこし早めにやつてきました。この王宮がすばらしい装飾によつていたるところ多彩に凝つており、ご主人の才能を示していないところは全くないと聞いております。

エウセビウス　あなたがたはそのような王様にふさわしい王宮を見ることでしよう。わたしにとってはそれはどんな王宮よりも大切な小さな巢であることは確かです。自分の心の考えのままに自由に暮らしている人が王であるとすれば、わたしはここで明らかに王なのです。しかし、台所の女主人（料理長）が野菜の用意をしており、太陽の熱もまだ穏やかなうちにわたしたちの庭園を見て回られたほうがよいと思います。

ティモテウス　それに優るものがほかにあるでしょうか。というのは、こちらの全く驚くほど手入れがしてある土地が入つて行く人たちにきわめて魅力的な光景をもつて、直ちに挨拶し、愛想よく受け入れてあるからです。

エウセビウス　ですから、みなさんはここで花や葉をいくらか摘んでください。それは部屋のみさ苦しさが不快感を与えないためです。同じ香はすべての人に等しく喜ばれたりしないものなのです。ですから各自で好きなように摘みましょう。惜しんだりしてはいけません。というのは、ここで生え育つものは何でもほとんど共有の財であることをわたしは許しているからです。その証拠にこの前庭の戸は夜でもなければ決して閉じることはありません。

ティモテウス　まあなんと戸口のところにはペテロが立つていてはなりませんか。

エウセビウス　わたしとしては彼を門番にしておきたいのです。メルクリウスのような者やケンタウルスのような者、

またその他の、ある人たちが戸口に描く怪物よりも好きなのです。

ティモテウス それはキリスト教徒にはとてもふさわしいことです。

エウセビウス わたしの門番は黙ってはおりません。彼は入ってくる人に三つの言語でもって語りかけています。

ティモテウス 何を語りかけているのですか。

エウセビウス どうしてご自分でお読みにならないのですか。

ティモテウス 目で見てとるには、すこし距離が遠すぎるのですよ。

エウセビウス あなたを助けて〔鋭い視力の〕リンケウスのようにする望遠鏡をお使いになってみては⁽⁹⁾。

ティモテウス ラテン語で「もし生命に入りたいと思うなら、戒めを守りなさい——マタイ一九章（二七節）」とあるのが見えます。

エウセビウス 今度はギリシア語で読んで下さい。

ティモテウス たしかにギリシア語が見えますが、わたしには通じません。ですからこの松明をテオピルスに渡しませぬ。彼はいつもギリシア語を口ずさんでいます。

テオピルス 「悔い改めて、本心に立ち返りなさい」（使徒言行録三章（一九節））。

クリュソグロットウス ヘブル語はわたしが引き受けましょう。「義人はその信仰によって生きる」（ハバクク書二・四（ローマー・一七に引用））。

エウセビウス 入るとすぐ悪徳から離れ、敬虔の探求に向かうようにわたしたちに警告する門番は、あなたがたには不躰に思われますか。次に生命にいたるのはモーセの律法によるのではなく、福音的な信仰によるとすすめ、最後に、永遠の生命にいたる道は福音の戒めを遵守することによると、彼は警告しています。

ティモテウス そして見てください。すぐ右手に入ると、とても上品な礼拝堂が見えます。祭壇にはイエス・キリスト

がいて天を仰ぎ見えています。⁽¹⁰⁾ 天から御父と聖霊とが前方を眺めておられ、イエスは右手を天の方に差し出し、左手はあたくも通行人を招き、引き寄せているようです。

エウセビウス 彼もまた黙つたままわたしたちを迎え入れているわけではありません。ラテン語で次のようにあります。「わたしは道であり、真理であり、生命である」(ヨハネ一四・六)。ギリシア語では「わたしはアルファであり、オメガである」(黙示二一・六)、ヘブル語では「子らよ、来てわたしに聞け、わたしは主の恐るべきことをあなたがたに教えよう」(詩三四・一一)とあります。⁽¹¹⁾

ティモテウス たしかに主イエスは喜ばしいお告げでもつてわたしたちに挨拶して下さいました。

エウセビウス しかし、不作法と思われなためにわたしたちが彼に挨拶を返し、次のように祈願するのは多分適切なことでしょう。わたしたちは自分自身から何もできないのですから、主がその測り知れない恵みによつてわたしたちが救いの道から迷い出ることを決して許されませんように。そうではなくユダヤの影と現世の幻影とが投げ捨てられたのち、福音の真理によつてわたしたちを永遠の生命に導いてくださるようになり、つまり、ご自身によつてご自身のもとにわたしたちを引き寄せてくださるようになり、と祈願するのです。

ティモテウス 全くもつて至当なことです。この場所の美観そのものが祈りへと人を招いております。

エウセビウス この庭園の魅力によつて多くの客が誘われております。しかしイエスに挨拶しないで誰も通り過ぎることができないほど、万人にとつて「敬虔の」習俗というものは一般に強力となっているのです。わたしがこのお方をとても汚らわしいプレアプスの代わり置いたのは、このわたしの庭園のためばかりではなく、わたしが所有しているすべてのもの、つまり身体と同じく心の見張りとしてなのです。

ここにはあなたが見ておられるように小さな泉があり、健康にとてもよい水が心地よく湧き出しております。それはいつでもあの唯一の泉のことを表わしています(ヨハネ四・一四)。その泉は天からの水によつて労苦し重荷を負

うているすべての人に力を与えますし、この世の災によつて疲労困憊した魂があえぎ求めているのはこの泉なので
す。その有様は詩編の作者によるなら、ヘビの肉を味わつたので、渴きをおぼえた牡鹿は、ここから無償で飲むこと
がゆるされています（詩編四二・一、二）。ある人たちは宗教的敬虔のため自分に水を振りかけ〔て浄めを行つ〕て
います。なかには渴きのためではなく、信心のゆえに水を飲む人たちもいます。

見うけたところ、あなたがたはこの場所から離れたくないようですが、そうするうちにも、わたしの王宮の壁が四
角に取り囲んでいる、もつとよく手入れされている庭園を見に行くように、時が促しています。家の中に見る価値の
あるものが何かあるとしたら、食事の後にもあなたがたは見られるでしょう。そのときには太陽が昇つて暑くな
り、カタツムリのようにわたしたちを家の中に数時間も閉じこめるでしょう。

ティモテウス おやまあ、エピクロス(13)の園を見ているようです。

エウセビウス このところはすべて快樂のためにもつばらあります。しかし快樂といつても高尚なもので、目を樂しま
せ、鼻を芳香で回復させ、心を生き返らすためなのです。ここには香しいハーブだけが生えています。また何でもよ
いというわけではなく、選り抜きのものだけです。そして草木の種類ごとに自分の区画をもっています。

ティモテウス わたしの見たところでは、あなたのところの草木も黙っていないようです。

エウセビウス まことにその通りです。豪盛な家をもっている人たちがほかにあつても、このわたしはとてよく語る
家をもっているのです。それはわたしが一人ぼつちだと思われているためなのです。あなたがすべてをご覧になれ
ば、そのことをもつとよくお分かりになります。草木が集団となつて分けられているように、それぞれの群れは、銘
の付いた旗を各自もっています。たとえば、このマヨラナですが、「近づいてはならない、豚。お前のために匂つて
いるのではない」と語っています。というのはマヨラナはとても甘い香りをもっていますが、豚はこの匂いによつて
ひどく不快になるからです。同じようにそれぞれの種類のものは自分の肩書きをもっていて、その草木の特性に関わ

るものを示しています。

ティモテウス わたしはこれまでこの小さな泉より心地よいものは何も見たことがありません。この泉は庭の中央にあつてすべての草木にほほえみかけているようです。また〔太陽の〕熱から草木を守つて涼しくすると約束しています。しかしこの泉の池は、人の目に水をすべて大きな喜びにあふれているものとして示し、庭の両面を等しい空間に分けており、その池の中にはちようど鏡に映すように草木が両側から眺められるようにうまく作つてありますが、この小さな河床は大理石でできているのでしょうか。

エウセビウス うまいことをおっしゃります。どこからここへと大理石をもつてこられましたか。これは砕かれた石で造られた模造の大理石でして、白い色を塗り付けた化粧張りなのです。

ティモテウス こんなに愛らしい流れは、いったいどこへ行つてしまうのでしょうか。

エウセビウス 人間が不法なのをご覧ください。この流れは人間の目を十分に楽しませたのちに、台所を洗い流し、そのごみをたずさえて下水道にまで運ぶのです。

ティモテウス 何とひどいことを。神よわたしをそんな目に会わせしないで下さい。

エウセビウス ひどいことです。もしも永遠なる神の慈愛がこのように用いるようにと備えて下さったのではないとしたら。この泉よりもつと喜びを与えてくれる聖書という泉、わたしたちの精神を再生させると同時に洗い清めるために与えられた泉を、わたしたちが悪徳と邪悪な欲望によつて汚し、こんなにも言い表しがたい神の賜物を誤用するときには、わたしたちはひどいことをしているのです。人が使用するようにと豊かに与えて下さらないことはない方が、水を与えて下さっている様々な用途に従つてわたしたちが使い分けるならば、この水をわたしたちは誤用してないのです。

ティモテウス あなたの言われることはまことにもつともです。ですが庭園の柵も緑なのは何故ですか。

エウセビウス ここでは緑でないものは何もないようにしています。赤色を好む人たちもおりますが、それは、この色
が加わると緑色をしたものがいつそう引き立つからです。わたしはこのほうが好きです。庭園に関しても、それぞれ
自分の考えをもっています。¹⁴

ティモテウス しかし、三つの開廊⁽¹⁵⁾が、それ自体できわめて優雅な庭園の快適さの邪魔となつていているようです。
エウセビウス これらの開廊でわたしは一人でか、または親しい友と語り合いながら、勉強したり、散策したり、ある
いは気に入れば食事をとつたりします。

ティモテウス 建物を支えている柱がありますね。それは建物を等間隔で支えており、驚くほど多様な色彩で魅了して
いますが、大理石でできているのですか。

エウセビウス この泉の池が造られたのと同じ〔人造〕大理石からできています。

ティモテウス 全くもつて優雅なあざむき方ですね。わたしはあやうく大理石だと断言してしまうところでした。

エウセビウス ですから、何かをわけもなく信じたり、断言しないほうがよいでしょう。外見というものはよく人を欺
くものです。わたしたちは財力に欠けているものを技術で補うのです。

ティモテウス あなたがさらに別の庭を絵に描かなかつたとしたら、こんなに美しくこんなにも手入れされた庭でもあ
なたは満足しなかつたのでしょうか。

エウセビウス 一つの庭だけですべての種類の草木を採り入れるには充分ではありません。さらに生花と〔美しさを〕
競い合っている花の絵を見ますと、喜びは二倍になります。つまり一方で自然の手ぎわに賛嘆し、他方において画家
の才能に驚きます。そして両者において神の恵み深さに驚嘆するのです。神はわたしたちの益のためにこれらすべて
を惜しみなく与えたまうのです。その恵みはすべてを貰いて等しく驚嘆すべきであり、かつ愛すべきものなのです。
総じて庭はいつも青々としているわけではなく、小さな花々がいつも咲いているわけでもないからです。けれども、

この庭は冬至のころでも青々としており、楽しませてくれます。

ティモテウス しかし、絵では薫りはしませんね。

エウセビウス でも、一方で手入れの必要がありません。

ティモテウス ただ目を楽しませるだけではありませんか。

エウセビウス そのとおりですが、そのことをいつまでも提供してくれます。

ティモテウス 絵画も古くなっていきます。

エウセビウス 古くはなりませんが、わたしたちよりも長生きし、年と共に優美さが一般に増し加わりましようが、この優美さというものはわたしからは奪われてしまいます。

ティモテウス あなたのおっしゃっていることが間違っていればよいのに。

エウセビウス 西に向かう開廊でわたしは朝日が昇るのを楽しみます。東をのぞむこの開廊で時折日向ぼっこをします。南に向いていても北に伸びているこちらの道でわたしは太陽の熱で元気を回復します。もしよろしければ散歩して、もつと近くから観察してみましよう。

ご覧なさい。土そのものも青々としていて、舗装の石も優美な色彩がほどこざれていて、小さな花がそこに描かれていて楽しませてくれます。この壁全体に描かれているご覧のこの木立は多種多様な光景をわたしに提供してくれます。まず、あなたが見ている樹木と同じ数だけ、樹木の種類があります。その一つ一つは自然のままのイメージにもとづいていて巧みに描写されています。あなたが認められる鳥の数だけ、鳥類の種類があります。とりわけ、どちらかというところと珍しく、何かある目立った特徴で人目をひく鳥の場合がそうです。というのは、鷺やメンドリやあひるを描いたからといって何になるというのです。下の方には四足動物の姿があります。または地上で四足動物のよう

うに生きている鳥類の姿が描かれています。

ティモテウス 驚くほど多様なものがおりますね。暇をもてあそんでいるものは何もありません。何かをしたり話したりしていないものはないのです。葉陰に隠れがちなフクロウはわたしたちに何を語っているのですか。

エウセビウス アテナイのフクロウはアツチカ語で話します。⁽¹⁶⁾「用心しなさい。わたしは皆のために飛んでいるのではない」と語っています。⁽¹⁷⁾それはわたしたちが思慮深く行動するように命じています。思慮を欠いた軽率さはすべての人に不幸をもたらすからです。ここでは鷲がウサギを引き裂き、他方ではカブト虫が救いを切願しても無益なのです。⁽¹⁸⁾カブト虫のところにもソサザイが居合わせておりますが、それはそれで鷲の不倶戴天の敵なのです。

ティモテウス このツバメはくちばしに何を運んでいるのですか。

エウセビウス (ツバメのすきな) くさむらの草です。つまり、これによつて目の見えないひな鳥が再び見えるようにしてやるのです。⁽¹⁹⁾あなたはこの草の比喩がお分かりでしょうか。

ティモテウス トカゲの中でこの新種は一体何んというものですか。

エウセビウス トカゲではなくて、カメレオンですよ。⁽²⁰⁾

ティモテウス これが長い呼び名で有名なあのカメレオンですか。わたしはライオンよりも大きな獣とばかり思っていました。カメレオンは名前によつてもライオンに勝っています。

エウセビウス これはいつも口をあけていて、終始飢えているカメレオンです。⁽²¹⁾この樹は野生のイチジクです。⁽²²⁾カメレオンはこの樹のところにいるときだけ荒々しくなります。ほかのときには害を加えません。それは毒をもっておりませんから、小さな動物が口をあけているからといって侮つてはいけません。

ティモテウス しかし、色が変わりませぬね。

エウセビウス そのとおり。場所が変わっておりませんから。場所を変えれば他の色が見られるでしょう。

ティモテウス この笛吹きはどうしたんですか。

エウセビウス　すぐ近くでラクダが踊っているのが見えませんか。⁽²³⁾

ティモテウス　奇妙な光景ですね。ラクダが浮かれて踊り、猿が曲を伴奏しているのですから。

エウセビウス　しかし、これらの一つ一つを暇にまかせて観賞なさるためには別の時が、すくなくともおそろくまる三日間もかかるでしょう。今は格子ごしに見た⁽²⁴⁾というだけで充分だとしておきましょう。

この区域には草木の特徴となつているものならずべて実物の姿のままに描かれております。あなたがたはきつとそれに驚かれるでしょう。こここのところの毒はとも速効性がありますが、安全に眺められますし、触ることもできます。

ティモテウス　見てください。サソリです。この地方ではあまり見られない害虫ですが、イタリヤにはたくさんいます。ですが絵に描いてある色があまり適切でないとなつたしには思われるのですが。

エウセビウス　どうですか。

ティモテウス　イタリヤにいるサソリはもつと色が黒いのですが、これはだいぶ青白いからです。

エウセビウス　しかし、サソリがその葉の中に落ち込んでいる草木に気がつきませんか。

ティモテウス　それだけではわかりません。

エウセビウス　わけのわからないことを言っているのではないのです。もちろんサソリはわたしたちの地方の庭園では育ちません。トリカブトがここにあります。この毒の力は大変なもので、サソリがこれに触れると、急に動かなくなり、青ざめ、捕獲されてしまうのです。ところが毒によって害を受けたサソリは毒によって救われたいと願うことでしょう。すぐ近くに二種類のヘレボルスがあるのが見えるでしょう。⁽²⁵⁾もしもサソリがトリカブトの葉から脱出して、ヘレボルスの白色に触れることができるとしたら、麻痺を取りのぞく別種の毒との接触によって以前の活力を取り戻すでしょう。

ティモテウス そうするとあのサソリの身に青ざめていることが起っているということですね。というのはトリカブトの葉から脱出することはないでしょうから。ここではサソリでも話すのですか。

エウセビウス サソリもギリシア語を話します。

ティモテウス 何と言っているのですか。

エウセビウス 「神は罪を見い出されている」⁽²⁶⁾と。ここでは草木の外にあらゆる種類の蛇をあなたがたは見るでしょう。

見てください。バシリスクトカゲです。激怒した目をして、猛毒をもっている恐ろしいトカゲです。⁽²⁷⁾

ティモテウス それもまた何か話しているのですか。

エウセビウス 「ただ恐れているだけでは〔我を〕憎むもやむなし」⁽²⁸⁾と言っています。

ティモテウス まったく王様のような発言ですね。

エウセビウス いいえ、これほど王らしくない発言はなく、かえって暴君の言葉です。ここではトカゲがマムシと争つ

ています。ここでは毒蛇がダチョウの卵の殻に隠れて待ち伏せています。ここには蟻の国家のすべてが見られます。

蟻を模倣するようにヘブライのあの賢人がわたしたちに呼びかけていますし、⁽²⁹⁾わたしたちのホラティウスもまたそう

しています。⁽³⁰⁾ここには金を持ち出し貯えているインドの蟻が見られます。⁽³¹⁾

ティモテウス おや、まあ、誓つてもよいのですが、この光景を観て回っている人たちに倦怠感が入り込む余地などありうるでしょうか。

エウセビウス また別の機会に飽き足りるまで眺めることがおできになります、と申し添えたいです。いまはただ遠くにあります三番目の壁をご覧ください。それには湖と海とが描かれていて、そこには珍しい魚なら何でもそろっています。これはナイル川で、この川の中には人間の味方のイルカがおりまして、人間にとりこれ以上不倶戴天の敵はないワニと戦っているのをご覧になられるでしょう。河岸や海岸にはカニやアザラシ、ビーバーといった両棲動物の類が

見られます。ここには貝によつて捕えられた貝を仕掛ける猟師のポリプがおります。⁽³²⁾

ティモテウス 何と言つているのですか。その「捕われた捕え人」とは。⁽³³⁾ 画家は驚くほど上手に海の水を透明に書いていますね。

エウセビウス いや、彼はこうしなければならなかつたのです。さもないとわたしたちは別の目をもたねばならなかつたでしょうから。すぐ隣にもう一つのポリプのオーム貝がいて海面のすれすれのところを帆走しており、リブルニヤ船にでもなつた気分です。⁽³⁴⁾ ご覧ください、シビレイイが自分と同色の砂の上に横たわつておりますよ。⁽³⁵⁾ ここでは手で触つても安全です。でも、次のところに急がねばなりません。

これらのものは目を楽しませてくれますが、お腹のほうは満たしてくれません。まだ見ていない残りの場所に急ぎましょう。

ティモテウス もつとあるのですか。

エウセビウス あなたがたは裏戸から見えるものを直ぐにもご覧になるでしょう。⁽³⁶⁾ ここには二つの部分にわけられたとても広い庭が見えます。一方は食用の草木がすべて揃つていて、妻とメイドがこの主人です。もう一方は葉草ならなんでもあつて、とりわけ珍種が揃つています。左手には緑の草だけがはえている広々とした草原があります。柵はいばらで編んでつなげた長持ちのする生垣できています。そのところでわたしは時々散歩したり、仲間とよく遊んだりします。右手には果樹園があります。そこには外国産の数多くの樹木がありますので、お暇の折に見てください。わたしはこれらの樹木がこちらの天候に慣れるように徐々に育てております。

ティモテウス なんとまあ、本当にあなたという方はアルキノウス王にさえ立ち優つておりますね。⁽³⁷⁾

エウセビウス この境には鳥小屋があつて、上の開廊につながつています。それは食事のあとでご覧になられるでしょう。鳥のいろいろな形や、さまざまなおしゃべりが聞かれるでしょう。また少なからず性質も色々となつてい

ます。あるものらの間では性質が似通っていて互いに愛情をとり交わし、あるものたちの間では和解できないような敵意を燃やし合っているのがかなりいます。とはいえ、みんなとても馴れておとなしく、わたしが食事をしているとき、その窓が開いていようものなら、食卓のところへ降りて来て手からでも食物をついばむほどです。わたしが友人とおしゃべりしながら、ご覧のあの小さな橋を渡るようなときがあると、近くにとまって、耳をそば立て、肩や腕にとまったりします。鳥たちはだれも害しないのを知っているので、恐れることを忘れてしまっているほどです。果樹園のずつと端の方に蜜蜂の国があります。それはたしかに、見て面白くはないような光景ですが、今はもうこれ以上あなたがたに見ていただこうとは思いません。あなたがたをあたかも新しい光景へ向かうようにと呼びもどすものがなおあるのです。昼食をとつてから残っているものをお見せしましょう。

ボーイ 奥様とメイドさんが昼食が台なしになってしまおうとさわいでいます。

エウセビウス 彼女たちに静かにしているように言いなさい。さあ、わたしたちはすぐ行きましょう。——みなさん、手を洗いましょう。手と心とを清めて食卓に向かいましょう。実際、異邦人にとつて食卓というのは宗教的なものであったとしたら、⁽³⁸⁾キリスト教徒にとつてそれはどれほど多く神聖なものでなければならぬことでしょう。というのは主なるイエスがその弟子たちと最後に催したもうた、あの最も神聖な晩餐の面影を食卓は宿しているからです。またそのためにも手を洗うことが習わしとなっています。それは心のなかに憎悪、嫉妬、不品行といった類のものが、ことよると残っている場合には、食事をとろうと食卓に近づくに先だつて、それを取り除くためなのです。こうして心が洗われて食事をとるなら、食物は身体にいつそう益となるとわたしは思っています。

ティモテウス それは誠にものごとくともな事だと思います。

エウセビウス 讚美歌を唱つて食事を開始するというこの手本はキリストご自身からわたしたちに伝えられております。それはキリストがパンを裂くに先立つて祝福し、父なる神に感謝したということをおわたしたちは福音書の中で読

んでいると信じているからなのです（マタイ一四・一九、一五・三六、二六・二六参照）。そしてまた讚美歌をもって食事を終えるという手本も伝えられています。もしよろしければ讚美歌をあなたがたのために朗読してあげましょう。その讚美歌というのは聖クリュストモスがある説教の中で驚くほどの賛辞をもって称賛し、解説しようとしているものです。

ティモテウス お考えのようには是非なさってください。「幼い頃よりわたしを養つて下さり、すべての被造物に食物を与えたもう御神に祝福あれ。わたしたちの心を歓喜でもって満たしたまえ。それは満ち足らすものをわたしたちが豊かにもつことによつてすべての善いわざに向かつてわたしたち自身を溢れんばかりに注ぎだすためです。それはわたしたちの主イエス・キリストにあつて可能なことです。キリストとともにあなたに栄光・名誉・支配が、聖霊とともにとこしなえにあらんことを」。

ティモテウス アーメン。

エウセビウス さあ、食卓にお付きください。また各人のお連れとご一緒にどうぞ席についてください。ティモテウス、あなたの白髪には最上の席がふさわしいです。

ティモテウス あなたはひとことでもつてわたしの価値のすべてを言い尽くされています。わたしが他の人たちに優っているのは、ただこの理由によつてだけなのです。

エウセビウス その他の天賦の才の判定者は神です。わたしたちとしては目に見えるものに従っているのです。ソフロニウス、あなたはいまおいでのところに座つてください。テオフィルスとエウラリウス、あなたがたは食卓の右側に席をお取りください。クリソグロトウスは左側にしましょう。ウラニウスとネファリウスは残つているところに坐つて下さい。わたしはこの隅つこに陣取りましょう。

ティモテウス それはいけません。ご主人は上席にふさわしいです。

エウセビウス この家はわたしのものですが、同時にあなたがたのものでもあります。しかし、もしわたしの国でわたしに特権がゆるぎを許さずなら、主人が自分に指定する席が彼にふさわしいのです。今はあのすべてのものに喜びを与え、その方なしには真実に心地よいものは何もない、キリストが、かたじけなくもこのわたしたちの午餐会の只中にいたまい、その現臨によってわたしたちの心を生き生きとさせて下さいませよう。

ティモテウス キリストがそのようにして下さるようわたしも望んでおります。しかし、もう席がみなふさがっているのですから、キリストはどこにお坐りになるのでしょうか。

エウセビウス キリストがすべての血と杯のうちにご自身をみだし、ご自身の味わいのないものがないようにしたまいますように。しかし、とりわけわたしたちの心に入つて来て下さいませよう。キリストがそのようにますますなしたまい、わたしたちがこんなにも偉大な主人にますます受け入れてもらうためにも、もしおいやでないなら、聖書を朗読しますので、しばらく傾聴なさってください。でもお聴きになっているあいだにも、もし望まれるのでしたら、卵やレタスに手をおつけになつてもかまいません。

ティモテウス 喜んでそうさせてもらいますが、拝聴するほうがもつと快適です。

エウセビウス こういう習慣は多くの理由から尊重されなければならないように思われます。というのはそれによつて馬鹿げた物語りを避け、豊かな会話の素材が与えられるからです。無益で浮かれた物語りで満たされていないと、また嫌悪すべき小唄が大声で歌われていないと、食事は愉快でないと考える人たちとは、わたしは意見を全く異にしていますから。真の快活さは純粹で真実な良心から生まれますし、語つたり聞いたことが喜びをもたらす、その想起もいつも楽しみであるような会話こそ真に愉快なものなのです。会話でもすぐに恥ずかしくなつたり、後悔の念によつて良心を苛責するようなものではないけません。

ティモテウス これらの言葉が真実であるかぎり、どこまでもわたしたちはみな吟味したいものです。

エウセビウス それらは確かにして著しく役立つものである点はよいとして、あなたが一ヶ月でもそれらに慣れさせれば、喜ばしいものとなります。

ティモテウス 要するに最善のものに慣れ親しむことよりも賢明なことではないのです。

エウセビウス ボーイさん、はつきりと明瞭に朗読しなさい。

ボーイ 「水の分流のように、王の心は主なる神の手のうちにあり、主が欲するところへこれを向けたもう。人の歩む道はすべて自分には正しいと思われる。しかし、主は人の心を吟味したもう。あわれみを施し、正しい判決をなすことは犠牲を捧げることよりも主に嘉せられる」(箴言二・一〜三)⁽⁴⁰⁾。

エウセビウス もうよろしい。多くの言葉をいやいやながら飲み込むよりも、僅かの言葉を熱心に学ぶ方が優っているからです。

ティモテウス まことに然りです。しかし、この聖書だけそうだというわけではありません。プリニウスはキケロの『義務について』を決して手離してはならないと記しております⁽⁴¹⁾。またわたしの意見では、この書物はすべての人によつて、とりわけ国政にたずさわるよう定められている人々によつて一語一語暗記するほど価値がありますね。とはいえ、この箴言という小冊子はいつもわたしたちが身につけて持ち運ぶほど価値があるとわたしは常に考えております。

エウセビウス わたしがこの調味料を調達しておいたのは、昼食が水っぽく味気ないものになってしまったのを知っていたからです。

ティモテウス ここに並んでいるものはすばらしいものばかりです。それにもかかわらず、もしもここに胡椒やワインや酢がなくて、フダンソー〔不断草〕しかないとしても、このような朗読はすべてのものをおいしくしますよ。

エウセビウス だが、もしわたしが聞いたことを深く理解できるとしたら、喜びはいつそう増大するはずですよ。

ら、それらの聖書の言葉を理解するだけでなく、まことに深く味わっているような神学者が本当に誰かいるとよいのですが。わたしたちはこのような事柄を平信徒が論じあたりしてもよいかどうか分りませぬ⁽⁴²⁾。

ティモテウス わたしの考えでは、判断を下すときに思慮が欠けていなければ、水夫たちですら許されています。多分、二人の者がその名を求めて集まって（キリストについて論じて）いるところならどこでもご自身が一緒にいると約束されたキリストは、こんなにも多勢いる（のですから）、わたしたちのところに来て助けて下さることでしょう（マタイ一八・二〇）。

エウセビウス では、三つの聖句をわたしたち九人で分担してはどうでしょうか。
客一同 いいですとも、ただし順番の方はご主人から開始して下さいましたら。

エウセビウス ご指命を退けるわけにはいきませんが、これですと食事でもてなすほどにはあなたがたをおもてなしできないかと心配なのです。それでは、気むずかしい主人だと思われないうちにも、注釈者たちがこの箇所積み上げた多種多様な解釈はわきにおいて、道徳的意味は次のようであるとわたしには思われます。

〔王以外の〕他の人々は警告・譴責・法・脅迫によつて方向転換させることはできません。しかし王の心は、だれをも恐れていないのですから、もし君が刃向かうなら、いつそう激怒させてしまうでしょう。ですから君主らが何かをひどく熱心に求めるなら、その都度、その気のむくままに放つておくべきです。というのは君主らがいつも最善のことを欲しているからではなく、神が彼らの愚かさや悪意とを罪を犯した人々を矯正するために利用したもうからです。こうして主はネブカドネザルに抵抗するのを禁じられたのですが（エレミヤ二七・二八）、彼の職務を用いて主がその民を罰しようとされたからです。おそらくヨブの次の言葉がそれを示しています。「主は民の罪のゆえに偽善者に民を治めさせる」（ヨブ三四・三〇）。また恐らく自分の罪を嘆き悲しんでいるダビデの言葉もこれに属します。「わたしはあなたに対してだけ罪を犯し、御前に悪を行いました」（詩五一・四）。このことは、王たちが民衆の蒙る

とても大きな災難に対して罪を犯していないと言っているのではなく、権威でもつて「彼らに」有罪の判決を下しうる人を彼らもつていないと言っているのです。というのは神の判決を、どんなに権勢のある人であろうと、だれも免れることができないからです。

ティモテウス あなたの解釈は好ましいものですが、「水の分流」というのはどういう意味でしょうか。

エウセビウス 事柄を説明するための比喩が付け加えられているのです。立腹している王の心は激しいものでして、抑えようがありません。それをあちらやこちらに導くことは不可能です。彼は自分の衝動によって、あたかも神的狂気にかり立てられているように、動かされています⁽⁴⁴⁾。それと同じように海の水も陸地に向かって飛び散ったり、時には進路を変えて、畠や建物、また行く手をはばむものは何でも物ともしないで向かって行きます。陸地のどこかに消えて行くのですが、その突進を妨げたり、他の方向へそらそうと試みても、どうすることもできません。アケロウス川について伝説もいい伝えておりますように、大河にも同じことが起りました⁽⁴⁵⁾。しかし、あなたが激しく対抗しないで、上手に従うならば、損害を受けることがずっと少なくなります。

ティモテウス それでは悪しき王たちの横暴に対する特効薬はないのですか。

エウセビウス おそらく第一にライオンを町の中に迎え入れないようにすべきでしょう⁽⁴⁶⁾。次に、専制政治にたやすく陥らないように、元老院・諸官職・市民等の権威によつて彼の権力を規制しなければなりません。だが、いちばん有効なのは、彼がまだ少年で、自分が君主であることを知らないうちに、神聖な戒めによつて彼の精神を形成することです。懇願や忠告も役立ちますが、丁寧にかつ時宜を得たものでなければなりません。最後の手段は、王の心をキリスト教的な王にふさわしいものへ傾けて下さるように祈願によつて神に迫ることです。

ティモテウス あなたはどうして「平信徒」とおっしゃるのでしょう。もしわたしが神学の得業士であつたとしても、この解釈をすこしも恥しく思わないでしょう。

エウセビウス それが良いかどうか知りません、その意見が不敬虔でも異端的でもないなら、わたしには十分です。わたしはあなたがたのご希望どおりに行いました。それでは午餐会にふさわしく、わたしは交替して聴き役にまわりたいと思います。

ティモテウス この白髪の老人にも何か言うことを許してください。この句はもつと秘められた意味にも適応できるとわたしには思われます。

エウセビウス わたしもそう思います。どうぞお聞かせ下さい。

ティモテウス そこに「王」とあるのは完全な人間とみなされることができ、その人は肉の情念を抑制して、ただ神の御霊の力によつてのみ導かれています。さらに、このような人を人間の法によつて規制しようと強いることは不適当なことであり、彼は自分の主——その御霊によつて彼は動かされているのですが——に委ねるべきです。彼は、それによつて不完全な人々の弱さがともかくも真の敬虔へと前進していくようなものによつて、判断されるべきではありません。しかし、もし彼が悪しきやり方で事を為す場合、パウロとともに次のように言わなければなりません。「主は彼を受け入れて下さった。彼が立つのも倒れるのもその主による」（ロマ書一四・三―四）と。また同様に「霊の人はすべてのことを判断するが、自分自身は誰によつても判断されない」（一コリント二・一五）。したがって誰もこのような人に命令することはできませんが、海と川の行き先を定められた主は御自身の王の心をその手のうちに収めておられ、望むところへはどこへでもそれを向けます。そこで、人間の法が果たすよりもより良きことを自発的に為す人に命令したりすることが必要でしょうか。あるいはまた、神の御霊の息によつて支配されていることが確かな証拠によつて明かであるような人を、規則によつて拘束することはどれほど無思慮なことでしょうか。

エウセビウス ティモテウスよ、あなたは真に、ただ年をとつて白髪であるばかりではなく、老人にふさわしい博識という尊ぶべき心をもつていらつしやいます。またキリスト者たちのなかで——彼らは皆王にならなければなら

かったのですが——この名にふさわしいこのような人々がもつと多く見いだされればよいのですが。しかし、もう卵から始めた食事と前菜の野菜は充分です。これらのものを取り除いて残りのものを食卓に運ぶよう命じなさい。

ティモテウス わたしたちはこの手始めの食事でもう満足です。⁽⁴⁷⁾たとえこれに続いて感謝祭や戦勝式といったものが何もなくてもです。

エウセビウス しかしわたしの考えによると、キリストが助けたもつて、最初の節は事がうまくはかどったのですから、あなたの従者がわたしたちに次の節について詳しく語ってくればよいのです。それはわたしには前のよりも少しばかり不明瞭だと思われれます。

ソプロニウス あなたがわたしの言うことに何でも同意してくれるおつもりでしたら、わたしは自分の考えることを熱心に話しましょう。そうでなければ影が闇に光をもたらすなどということがどうして可能でしょうか。⁽⁴⁸⁾

エウセビウス 確かにわたしは皆に代わつて、あなたのご提案を受け入れます。またこのような影はわたしの目にいつそうふさわしい自分の光をもっているものです。

ソプロニウス 「これは」パウロが教えているのと同じことを教えているように思われます。つまりさまざまな生活様式によつて敬虔へと引き寄せられるということです。ある人には司祭職が気に入り、独身がよい人もいれば、結婚がよい人もおり、隠遁生活が好きなの人もいれば、国家が好きなの人もいますが、それらは多種多様な体質や気質に従つたものです。また何でも食べる人もいれば（ロマ一四・二—三）、食物に区別をつける人もおり、食べる日を決めている人もいれば（ロマ一四・五）、いつでも食べる人もいます。これらのことに関してパウロは各人が自分の好みを享受して、他人のことはとやかく言わないように望んでいます。誰もこのようなことにもとづいて判断してはならず、心をはかられる神に判断をゆだねなければなりません（一コリント四・三一—五）。というのも、しばしば次のようなことが起こるからです。つまり食べる者が食べない者より気に入るものであったり、祝日をけがす者がそれを尊んで

いるように見える人よりも神に受け入れられる者であつたりするということです。ある者の結婚が多くの人々の独身生活よりも神の目に入るものであつたりします。影はこのように語りました。

エウセビウス 願わくはそのような影〔武者〕たちと話すという幸運がときどきわたしに訪れますように。わたしが間違つていなければ、あなたは、人びとがよく言うように、⁽⁴⁹⁾針でもつてではなく、弁舌でもつて問題点に触れました。しかし、ここには独身者として生きた人でも、神の国のために自ら虚勢した（マタイ一九・一二）福者たちの数には入つておりません。こちらの生き物は、神がお腹と食べ物とを滅ぼしてしまふまで（一コリント六・一二）、お腹をさらに喜ばすために強力に去勢されています。それはわたしたちの飼育場から連れてきた〔去勢された〕食用鶏です。わたしはよくゆでた料理が好きです。その上にかけている煮出し汁がまずくはないし、レタスは必ずば抜けてうまい。各は自分に気に入つたものを選んで食べます。しかし、わたしはあなたがたをだましたくないです。わたしたちはこの後で焼き肉を食べます。それからすぐにデザートをとります。そうするとついに話しが終りとなります。

ティモテウス ところで、わたしたちはこれまでのところ、あなたの奥方を閉め出しています。

エウセビウス あなたがたがそれぞれのお連れとご一緒に来られるならば、わたしの妻も同席するでしょう。彼女はいま沈黙の人であるほか何を願うでしょうか。⁽⁵⁰⁾また彼女は婦人として婦人たち同志でおしゃべりするのが好きです。わたしたちはもつと自由に哲学するのです。⁽⁵¹⁾そうでないと、ソクラテスに起つたことがわたしたちにも起る危険が生じるでしょう。彼が哲学者たちを食客として招きまして——この人たちには食事よりも談話のほうが好きです——、討論がとても長びいたとき、クサンツチツペは怒つてテーブルをひっくり返しました。⁽⁵²⁾

ティモテウス わたしたちはあなたの奥さんを怖がる必要は全くないと思います。なぜなら、奥さんはとても穏和な性格のお方ですから。

エウセビウス 彼女はわたしにはそのようですから、たとえ妻を代えることが許されていても、代えたくないです。こ

の点でわたしはとりわけ幸運であるように思われます。なぜなら、妻を一度ももつたことのない人は幸いだと考える人たちの意見にわたしは賛成しませんから。むしろわたしは「よい妻をもつ人は幸運を手に入れている」とヘブライ人の知者が言ったことが好きです。⁽⁵⁴⁾

ティモテウス 妻たちが良くないのは、時折わたしたち自身の落ち度に由来します。その理由はわたしたちが悪い妻を選んだからか、悪い妻にしたからか、それとも当然すべきであるように訓練し教えないからです。⁽⁵⁵⁾

エウセビウス 真にそのとおりです。しかし、わたしは同時に第三の意見が述べられることを期待します。テオフィリルスが神から靈感を授けられてもう発言する準備ができてるように思われます。⁽⁵⁶⁾

テオフィリルス いいえ、わたしの心はお皿のほうにのみ向かっていました。しかし、お叱りを受けずに発言できるのであれば、そう致しましょう。

エウセビウス わたしたちの許可を受けてあなたは誤ることが許されています。そういうようにして、あなたは真理を発見する機会をわたしたちに与えてくださるでしょう。

テオフィリルス それはわたしには預言者ホセヤがその第六章で「わたしが喜ぶのは愛であつていけにえではなく、神を知ることであつて、焼き尽くす捧げものではない」(六・六)と言つて提示した見解と同じように思われます。⁽⁵⁷⁾この見解の生ける有益な解説者はマタイによる福音書第九章の主イエスです。⁽⁵⁸⁾徴税人であつたレビの家で主が食事をとつていたとき、レビは自分と同じ身分と職業の多くの人たちを食事に招待しておりました。律法による敬虔を誇つていたが、律法と預言者の全体がそれに依存していた戒めを無視していたパリサイ人たちは、弟子たちの心をイエスから引き離そうとして、どうして主が罪人たちと食事を一緒にしているのかと弟子たちに尋ねました。ユダヤ人たちは、いつそう聖なる者であろうと欲したので、この罪人たちの仲間となることから遠ざかっていたのです。そしてもしこつちういう人とたまたま出会つたときには、彼らは家に帰るとすぐに身体を洗つていました。⁽⁶⁰⁾そして弟子たちがまだ

未経験のゆえに答えに窮していると、主は自分と弟子たちのために次のように語ってお答えになりました。「医者が必要とするのは丈夫な人でなく病人である。へわたくしが求めているのは憐れみであつて、いけにえではない」とはどういう意味か、行つて学びなさい。わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイ九・一二、一三)と。

エウセビウス あなたは聖書の出典を比較して問題を見事に説明されました。それは聖書研究のすぐれた方法です。しかし、わたしは犠牲とは何であるか、憐れみとは何であるかを学びたいです。実際、そのさいに、神がこのように多くの戒めでもつて捧げるように命じていた犠牲を退けているのを、誰が支持するでしょうか。

テオフィリルス どのように神が犠牲を退けたかをイザヤ書第一章において神はご自身で教えています。⁽⁶²⁾律法の中にはユダヤ人たちに教示したものがありません。それは聖性(の実体)を証明するよりも示唆しています。この種のものには祝祭日、安息日、断食、犠牲があります。また絶えず守るように命じられているものがあります。それらは本性上善なるものであつて、命じられたから善なものではありません。⁽⁶³⁾神はユダヤ人を退けられたのは、彼らが律法の典礼を守つたからではなく、律法によつて愚かにも高慢になり、神がとくに彼らから求めているものをなおざりにしたからです。彼らは貪欲・傲慢・強奪・憎しみ・嫉妬その他の悪徳に満たされて、祝祭日には神殿の中に滞在し、焼き尽くす犠牲を捧げ、禁じられた食物を抑制し、時折断食するならば、神がそれに報いる義務が大いにあると考えました。彼らは諸々の影を抱擁し、実質をなおざりにしました。⁽⁶⁴⁾「わたしが求めているのは憐れみであつて、いけにえではない」と言われていることに関しては、「わたしが求めているのはいけにえよりも憐れみである」ことに対するヘブライ的な慣用的表現であると思われまふ。それは「憐れみと正しい裁きを行なうことはいけにえを捧げることよりも主に喜ばれる」(箴言二一・三)とソロモンが言うときに解釈されたのと同じです。さらに聖書は隣人を助けるためになされる親切のすべてを憐れみと施しと呼んでいます。この施しという語はその名称を憐れむことに由来していま

す。⁽⁶⁶⁾「いけにえ」(犠牲)という語は形態的な儀式に関係しているすべてとユダヤ的な習慣と関連のあることを呼んでいると思われまゝ。たとえば食物の選択・衣服の規定・断食・いけにえ・任務として果たされる(「うわべだけの」)祈祷・祝祭日の安息がそれです。⁽⁶⁶⁾これらのことは時に応じて全くゆるがせにすべきではないのですが、この種のことを遵守していると告白する人が、困窮した兄弟が親切なる愛を求めているときに、いつも憐れみをゆるがせにするならば、神に対し忘恩となります。悪人との会話を避けることは聖性の外観を呈しますが、隣人に対する愛が何か別のことを促すたびに、それは終わらざるをえません。祝祭日に休むことは義務でありませんが、毎日の勤行のために兄弟が破滅するのを放置するのは不敬虔でしょう。したがって主日を守るのは犠牲的な行為であると言いたいのですが、兄弟と和解することは憐れみの行為です。さらに弱い人びとを力でもってしばしば抑圧する支配者たちに正義が適応されるけれども、それでも「また神を知ることがは焼き尽くす献げ物に優る」(ホセヤ六・六)とホセヤ書で言われている言葉でもって応答することは無意味ではないようにわたしには思われます。神の御心にしたがつて律法を守らない人は律法を守っていません。ユダヤ人たちは陥穽に落ちた驢馬を引き上げていたのに、安息日にある人の全身を救ったキリストを罵りました。これは転倒した判断でした。そして神の知識から離れていました。なぜなら彼らは、これらの戒めが人間のために定められたのに、人間が戒めのためにはないということを知らなかつたからです。しかし、あなたのご命令によつて言うのではないとしたら、このように語るの厚かましいと思われかも知れません。わたしは他の人たちからいつそう正しいことをむしろ学びたいのです。⁽⁶⁷⁾

エウセビウス わたしには主イエスがあなただのお口をとおして語っていると信じるように語るほうが、かえつて厚かましいと思われまゝ。しかし、そんな風にしてわたしたちが自分たちの精神をととても豊に養っている間に、「精神の」仲間が軽視されてはなりません。

テオフィリルス いったい誰のことですか。

エウセビウス わたしたちの身体です。身体は精神の仲間ではないのですか。わたしは、実際、道具や住まい、または墓よりも仲間を選びたいです。⁽⁶⁸⁾

ティモテウス 人間の全体が活気づけられるとき、それは確かに豊に活気づけられると言われます。

エウセビウス お見受けするところ、皆様は食事に手を付けられるのに怠けておられます。ですから、お許しをえて、焼き肉を差し上げましょう。それは立派なご馳走の代わりに長びいた馳走を提供しないためなのです。これがわたしたちのささやかな午餐会の主な品です。小さいがえり抜き羊の肩肉と去勢雄鶏と四つのヤマウズラの肉です。このヤマウズラの肉だけをわたしは市場で買いますが、そのほかはわたしの小農場が提供します。

ティモテウス エピクロス的な午餐会ですね。シバリス的な奢侈な食事とは言わないまでも。⁽⁶⁹⁾

エウセビウス そうではありません。とてもカルメル会的ではありません。⁽⁷⁰⁾ですが、それが何であれ、あなたがたは良いものと認めてくださるでしょう。食事のほうは少しも豪華ではございませんが、わたしの意向は確かに飾らないものです。

ティモテウス あなたの家はとても黙っておりませんので、壁だけでなく、手元の盃もお話ししています。

エウセビウス 何をあなたに話していますか。

ティモテウス 誰も自分による以外に傷つけられない。⁽⁷¹⁾

エウセビウス 盃がぶどう酒を弁護して語っているのです。というのは民衆はお酒を飲んで熱が出たり頭痛を引き起こすと、過度に飲むことよって災難を引き寄せているのに、ぶどう酒をよく非難しますから。

ソフロニウス 私の盃はギリシア語で「酒中真あり」と語っています。⁽⁷²⁾

エウセビウス それは司祭たちや王に仕える者たちがぶどう酒に耽ることは危険であると警告しています。というのは、ぶどう酒が心の中に秘めていることをすべて通常は口に出してしまうからです。

ソフロニウス、エジプト人のところでは、人びとがいまだその秘密を司祭たちに打ち明ける習慣をもっていなかったのですが、司祭がぶどう酒を飲むことは許されていませんでした。⁽⁷³⁾

エウセビウス 今日ではぶどう酒を飲むことが万人に許されています。これが好都合か否か分かりません。エウラリウス、あなたが小袋の中から取り出した小さな本は何ですか。とても上品な本そうですね。その外装がすべて金箔ですから。

エウラリウス しかし中身は宝石に優つて輝いています。それはパウロの手紙です。私はそれを入りとしていつも持ち歩いています。あなたのお話が、以前から永らく苦しめられ、未だ心に満足がえられない聖書のある箇所を思い起こさせたので、それを今取り出します。それは第一コリントの六章にあります。「わたしには、すべてのことが許されている」。しかし、すべてのが益になるわけではない。へわたしには、すべてのことが許されている。しかし、わたしは何事にも支配されはしない」(六・一二〜一三)。第一に、もしわたしたちがストア派の人たちを信じるなら、それが同時に品行方正でない、何も役立たない。それではパウロは許されていることと役立つこととをどのように区別しているのでしょうか。娼婦を買うことや酩酊することは確かに許されておりません。そうすると、どうしてすべてのが許されているのでしょうか。そのすべてが許されるべきだと願っている、ある種の事柄についてパウロが語っているなら、その種類が何であるのか、わたしはこの聖句の趣旨から正しく予想することができます。きません。この聖句に直属する箇所からは彼が食物の選択について語っていると推測することができます。というのはある人たちは偶像に献さげられた肉から遠ざかっていましたし、ある人たちはモーセによつて禁じられた食物から遠ざかっていましたから。そしてパウロは偶像に献さげられた肉について八章と一〇章とで語っています。⁽⁷⁴⁾ 彼はこの聖句の意味を説明するかのように次のように言います。「わたしには、すべてのことが許されている。しかし、すべてののが益になるわけではない。わたしには、すべてのことが許されている。しかし、すべてが徳を建てるわけ

はない。誰も自分のものを求めるべきではなく、他人の善を求めるべきである。食品市場で売られている物はすべて食べなさい⁽⁷⁵⁾」と。パウロがここで勧めていることはすべて彼が前に「食物は腹のため、腹は食物のためにあるが、神はそのいずれをも滅ぼされます」(同六・一二)と言ったことと一致します。彼がここでユダヤ人の食物選択のことを考慮していたことは一〇章の終りの部分が示しています。「ユダヤ人にも、異邦人にも、神の教会にも、あなたがたは人の感情を損なわないようにしなさい。わたしも、人びとを救うために、自分の益ではなく、多くの人びとの益を求めて、すべての点ですべての人を喜ばそうとしています」(同一〇・三二―三三)。「異邦人に」と言われていることは偶像に献さげられた肉と関係していると思われれます。「ユダヤ人に」と言われたことは食物選択と関連すると思われれます。「神の教会に」と言われていることは両方の種族から集められた弱い人たちと関係しています。したがってどんな食物でも食べることが許されています。「清い人にはすべてが清いのです」(テトス一・一五)。しかし、これが役立たないような場合が起つてきます。すべてのことが許されているというのは福音の自由に属していますが、愛は隣人の救いに役立つことを到るところで希望し、そのために許されていることをしばしば遠ざけ、自分の自由を行使するよりも隣人の益となることに同意するのを好みます⁽⁷⁶⁾。

しかし、ここで二つの難問がわたしを悩ませます。第一に、これまでのお話しとの関連からすると、この意味と密接に関連しているものが何ものも先行したり、後続していないことです。実際、パウロはコリントの人たちを彼らが反抗的であり、放蕩・姦淫・淫乱によつて汚れており、また不敬虔な裁判官のところへ訴訟を起しているとなんぞ非難しておりました⁽⁷⁷⁾。これらの言葉と「わたしには、すべてのことが許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない」とは、どのように密接に関係しているのですか。またこれに続く発言で使徒は訴訟問題を中断して、以前にも考察していたのですが、恥ずべきことの原因に戻っています。彼は言う、身体は姦淫のためではなく主のためにあり、主は身体のためにあります⁽⁷⁸⁾、と。

しかし彼が少し前に「間違つてはいけません。みだらな者、偶像を礼拝する者、姦淫する者……」（同六・九）と言つて、悪徳のカタログの中に偶像礼拝をもあげていましたので、わたしはこの問題をもともかく解決することができます。さらに偶像に献さげたものを食することは偶像礼拝に傾いていました。ですから彼は直ちに「食物は腹のため、腹は食物のためにある」（同六・一二）と続けています。その意味は隣人に対する愛が他のことを勧告しないなら、身体のために時に応じて何でも食することが許されているということです。しかしみだらなことは、いつでもどこでも、嫌悪されるべきです。わたしたちが食することは必要なことですが、この必要は死人の復活のときには取り去られます。わたしたちが放蕩に耽ることは邪悪なことです。

だが、わたしはそのことが「しかし、わたしは誰の力にも支配されないであろう」（同六・一三）とある聖句とどのように関係しているのかという第二の難問を解くことができません。なぜなら彼はすべての権力が自分に属しているが、それでも誰の力にも支配されないであろうと言うからです。他人の感情を損なわないように節制する人が他人の力に支配されていると言われるならば、それはパウロが九章で自分自身について「わたしはすべての人に対して自由ですが、すべての人をうるために、すべての人の奴隷となりました」（同九・一九）と言っていることと同じです。わたしが思うに、このことが聖アンブロシウスの躓いた難問です。彼は次のように考えました。使徒の本来的な意図は、——使徒たちであろうと偽の使徒たちであろうと、彼らは福音を説教していた人たちから生活に必要なものをえていたのであるが——使徒が他の人たちが行なつていたことを自分も行なう力をもつてると九章で言うために道を準備しているということである、と。しかしながら、このようなことが許されていようと彼がそれを差し控えたのは、あれほど多くの著しい悪徳を非難していたコリントの人たちに役立つためでした。さらに何かを受け取る人はだれでも、それを受け取った人に多少は拘束されますし、権威の力を何かしら失います。まことに受け取る人は批判する自由を減少させているのです。そして事実、授与した人は受益者から非難されることに同じく我慢できません。し

たがって、この点で使徒は使徒的な自由を考慮して許されていたことを差し控えました。この自由を彼はもつと自由に、かつ、もつと大きな権威をもつて、彼らの悪徳を非難するために誰にも拘束されるのを欲しなかったのです。

アンブロシウスの意見がわたしに魅力がなくはないことは確かです。それにもかかわらず、だれかがこの聖句を食物に適用するのを選ぶなら、わたしの意見はこうです。「しかし、わたしは誰の力にも支配されないのであるう」とパウロが言っていることは次のように理解できます。「隣人の救いや福音の前進を考慮して、犠牲に献さげられた、あるいはモーセ律法によつて禁じられた、食物をわたしがときどき遠ざけているとしても、それでも純粹に身体のためなら、どのような食物を食べることも許されている、と知っているがゆえに、わたしの精神は自由です、と」。しかし偽使徒は、ある種の食物がそれ自身で汚れており、ときには遠ざけるべきではなく、わたしたちが殺人や姦淫を遠ざけるのと同様に、本性において邪悪であるかのように、絶えず抑制すべきであると、説得するように試みようしました。このように説得された人たちは他なる権力のもとに引き入れられており、福音の自由から転落してしまっていました。

わたしが想起するかぎり、テオフィラクトゥスだけがみんなとは相違した意見をそこから引き出しました。つまり、「人はすべてを食することが許されているにしても、放縱であつては役に立たない。なぜなら過度であることはみだらなことを産み出すからです」。この解釈は不敬虔ではないけれども、この聖句の真正な意味ではないようにわたしには想われます。わたしを苦しめていたものをあなたがたに示しました。あなたがたの愛がわたしをこの難問から解放つことでしょう。

エウセビウス あなたはご自身の名前に適切にも応じておられます⁽⁷⁹⁾。そのように質問を提示することを「存じの人は、それを解答する他の人を必要としません。なぜなら、パウロがその手紙の中で同時に多くのことを論じようと決めた

がゆえに、一つの主題から他の主題へしばしば移つていたり、中止していたものを再び考察しているにもかかわら

ず、あなたはご自分の疑問点を、わたし自身がもはや疑わないような仕方でもって提示されましたから。

クリソグロットウス わたしがお喋りによつてあなたがたのお食事の邪魔となるのを恐れないなら、またそのように信仰的な会話に世俗の著作家から何かを付加することが赦されて良いと考えるなら、今日それを読んでわたしを苦しめるどころかとても喜ばせたものをわたしも提供したいです。

エウセビウス とんでもない。敬虔であつて良い道徳に役立つものはすべて世俗的であると呼ばれるべきではありません。もちろん聖書はどんな場合でも第一の権威にふさわしい。しかし、わたしはときどき古典の作家たちによつて語られたものに、あるいは異邦人の書物に、また詩人たちの書物にさえ出会います。それらがとても高潔で、信心深く、素晴らしいので、彼らがそれらを書くときに、何か善い神性が彼らの心を突き動かしていると信じないわけにはいきません⁽⁸⁰⁾。恐らくわたしたちが認めるよりも広範囲にキリストの霊が注がれているのでしよう。わたしたちの名簿には含まれていない多くの人たちが聖徒の仲間にはいるのです。友人たちの中でわたしの好みを告白しましょう。何度も書物に口づけしないでは、また天界の神性によつて吹き込まれた気高い心に敬意を表しないでは、読むことができないものに、キケロの『老年について』、『友情について』、『義務について』、『トウスクルム荘対談集』があります。それに対してわたしが国家について、経済について、倫理について教えを説いている最近の著作家のいくつかを読んでみますと、不滅の神よ、それらと比較すると何と味わないことでしょう。否、彼らは自分が書いていることを信じていないように思われます。ですからキケロやプルタルコスの一つの書物よりもスコトゥスの全部が彼に類似するいくつかの書物と一緒に滅んでしまうほうが、わたしには耐えやすいです。それはわたしが後者をことごとく断罪するためではなく、前者によつてわたしが善良な者とされると感じるからです。後者を読んでいると、どうしか分かりませんが、真実な徳に対する冷え冷えとした気分が起つて来るし、論争に挑発されるのです。ですから、それを提供なさるのをためらわないでください。

クリソグロットウス 哲学について書かれたキケロの大概の書物は何か神的な靈感を受けているように思われますが、彼が老人として『老年について』書いたものは、ギリシヤ人のもとで格言にあるように、全く白鳥の歌(81)のようにわたしには想われません。それをわたしは今日再読し、次の言葉を他に優つて気に入りましたので暗記しました。

「またもしどなたか神様が、この歳から赤子に返り、揺り籠で泣くことを許して下さるとしても、きつぱりと断るだろう。言うならば、折角コースを走り終えたのに、ゴールから出発点へと呼び戻されるようなことはまっぴらだ。人生にはどんな利点があるか。というより、どんな苦勞がないであろうか。確かに利点があるにしても、必ずや飽和か限度がある。多くの、それも学識ある人たちが繰り返したことだが、生を嘆くのはわしの氣に染まぬ。また、生きてきたことに不満を覚えるものでもない。無駄に生まれてきたと考えずに済むような生き方をしてきたからな。そしてわしは、わが家からではなく旅の宿から立ち去るようにこの世を去る。自然はわれわれに、住みついたためではなく飯の宿りのために旅籠を下さつたのだから。魂たちの寄り集う彼の神聖な集まりへと旅立つ日の、そしてこの喧騒(82)と汚濁(83)の世から立ち去る日の、何と晴れやかなことか」。

カトーはこれまでにしよう(83)。もつと敬虔にキリスト教徒から何を聞くことができるでしょうか。すべての修道士の対話も、あるいは修道士と修道女との対話も異教徒の老人と異教徒の若者とのこの対話のようであつてほしい。

エウセビウス しかし、だれかが対話はキケロによつて作成されたと抗弁するでしょう。

クリソグロットウス そのように考へて語つたことに対する称賛がカトーに帰せられようと、キケロに帰せられようと、わたしにはたいした問題ではありません。キケロの心がそんなにも神聖な考えを想像力によつて表現し、彼の筆が着めるに値する主題をそれに匹敵する弁舌の才をもつて描き出したのです。実際、カトーがそれと同じ言葉を語らなかつたとはいへ、それでも彼はそれと似た言葉を会話の中で語る習慣であつたと、わたしには思われます。というのはマルクス・トリウス（・キケロ）は彼が実際あつたとは別のカトーを捏造するほど、またはこの種類の著作にお

いては真つ先に考慮すべきことであり、とりわけ著者の同時代人の心にその人物の記憶がまだ新しく残っているときに考慮すべきである、対話の中で礼節(84)をわきまえなかつたほど、恥知らずではなかつたからです。(85)

テオフィルス 真にあなたの仰ることは本当です。だが、あなたがキケロを朗唱している間にわたしに思い浮かんだことをお話ししましょう。すべての人は長く生きることを望んでおり、死を恐れているのに、老人とは言わなくとも、かなりの年配の人が、人生においてすでに彼に生じたのと同じ善と悪のすべてを経験しながら、もしできることなら再び子どもに戻りたいか否かという質問に対し、カトーが述べたことに同意しないほどの幸福を確かに見つけている人がいない事実には、わたしは驚嘆しました。とりわけ、過ぎ去つた歳月に悲しくも、あるいは喜ばしくも遭遇したことは何でも心に想起する場合にはそうです。というのは楽しかつたことの回想にはしばしば恥や良心の苦悩が付きまといつていたので、心は悲しいことと同じくそれらを想起するのを嫌がりませんから。このことをもつとも賢明な詩人たちやわたしたちに告げていると思われます。彼らは書いています、魂がレーテの川から忘却の水をたくさん飲んだ後に、やつと、あとに残した身体に対する願望に捕らわれると。

ウルアニウス それは全くおかしいことです。わたしもその例をいくつか聞き及んでおります。しかし、わたしを魅了したのは「わたしは生きてきたことを後悔しません」という言葉です。とはいえ、いかに少数のキリスト教徒たちが、この老人の言葉を自分に適用できるほど自分の生活を節度をもつて整えているでしょうか。民衆は、死に際して何とかして築き上げた豊かな財産を遺産として残せるなら、自分らが無益に生きてきたのではないと考えます。しかしカトーは、自分が共和国の健全で崇高な市民であつて、後世の人びとに徳と勤勉からなる不朽の業績を残すような、清廉潔白な政務官であることを示すなら、自分が生まれてきたのは無益ではなかつたと考えるでしょう。「わたしは、わが家からではなく旅の宿から立ち去るようにこの世を去る」という言葉に優つてすばらしい何を言うことができたでしょうか。さしあたって主人が立ち去るように命じるまでは、宿屋を使うことが許されます。自分の家からは

人は容易に追い立てられません。それでも倒壊とか火災とかそのほかの出来事がしばしば人を家から追い出します。これらのことが起らなくとも、歳月とともに建物が老朽化するがゆえに、引越すように警告されます。

ネファリウス それに劣らず急所をついているのはソクラテスがプラトンの著作で語っている発言です。「人間の魂は身体の中に陣営にいるように置かれており、最高指揮官の命令なしにはそこを立ち去るべきではないし、その部署につかされたお方によしと思われるよりも長くそこに滞在すべきではない」⁽⁸⁶⁾。プラトンが「家」の代わりに「陣営」と語ったことはいつそう意味が深いです。実際、わたしたちは家では単に滞在するだけなのですが、陣営ではわたしたちの指揮官がわたしたちに指示した課題を遂行するように任命されているからです。このことは人間の生活があるときは兵役であり、あるときは戦闘であると語っている、わたしたちの聖書と一致しております。⁽⁸⁷⁾

ウラニウス しかし、わたしにはカトーの演説がパウロのそれと見事に一致していると思われれます。パウロはコリントの信徒たちに、わたしたちは死後に望んでいる天上の住まいをオイキアまたオイケーテリオン、つまり家もしくは居所と呼んでいます。その他では彼はこの小さな身体を幕屋、ギリシア語のスクエーノスと呼んでいます。そして言います、「というのはこの幕屋にいるわたしたちは重荷を負って呻いているから」(IIコリント五・一以下)と。

ネファリウス それはペトロの説教と一致しなくもありません。彼は次のように言っています。「わたしはこの幕屋にいる間はあなたがたにこれを思い出させて、奮起させたいと思います。わたしが自分の幕屋を速やかに去ることは確かです」(IIペトロ一・一三、一四)。キリストがわたしたちに求めていることは、他でもないすぐにでも死ぬかのようにならないうにわたしたちが生きて、かつ、目覚め、いつまでも生きるかのように善きわざに励まねばならないということではないでしょうか。あの栄光に輝く日よ、という声を聞くときには、もうパウロ自身が「この世を去ってキリストとともにいたいと熱望する」(フィリ一・二三)と語っているのを聞くように思われませんか。

クリソグロットウス そのような気持ちを懐いて死を待ち望む人は何と幸いなことでしょうか。とはいえカトーの演説に

対して、それはとても素晴らしいのですが、人はそれをキリスト教的な人間からは、当然、遙かにかけ離れている高慢に起因すると確信として非難することができます。ですからソクラテスが毒人參を飲む少し前にクリトンに語ったことにまして、正しいキリスト教的な人間にいつそうふさわしく一致するものを、異教徒の間ではかつて読んだことがないと、わたしには思われます。彼は言う、「神がわたしたちのわざを承認してくだされるであろうか、わたしには分からない。確かにわたしたちは神に喜ばれようと熱心に努めてきた。だが、わたしたちは神がわたしたちの努力によく配慮してくださるという良い希望を懐いている」⁽⁸⁸⁾。こういう人は自分のわざに疑念を懐いています。それが、神の御心に服従しようと傾く心の意志のゆえに、善く生きようと志したので、神がまさしくその慈しみをもってよく配慮してくださるであろうという素晴らしい希望を心に描くことでしよう。

ネファリウス それは確かにキリストも聖書も知らなかった人における賛嘆すべき精神です。ですから、わたしはそのような人についてそうしたことを読むときには、聖なるソクラテスよ、わたしたちのために祈ってください、と、どうしても言わざるをえません。

クリソグロットウス しかし、わたしはヴィリギリウスとホラティウスの神聖なる魂を素晴らしいと称えることをしばしば抑制できなくなりました。

ネファリウス それでも、このわたしはどれほど多くのキリスト教徒が寒々とした気持ちになって死んでいったのを見たことか。ある人たちは信頼すべきでないものに信頼しています。他の人たちは、無学な人たちが死にゆく人たちに苦しめる、悪行に対する良心と疑惑のゆえに、絶望して息絶えています。

クリソグロットウス 全生涯をとおして宗教的儀礼について頭を悩ませてきた人がそのように死ぬのは少しも不思議ではありません。

ネファリウス その儀礼という言葉で何が意味されるのですか。

クリソグロットウス お話ししましょう。ですが、わたしが教会のサクラメントと典礼を断罪するのではなく、むしろ熱烈に是認していることを前もって申し上げておきます。わたしが断罪するのは、ある種の不信仰で迷信的な人たち、できるかぎり穏やかに言いますと、単純で無学な人たちなのでして、彼らは人びとがこういったものに信賴するように教えていますが、わたしたちを真にキリスト教徒にするものをなおざりにしています。

ネフアリウス どういう方向に行かれるのか、まだ充分に理解できません。

クリソグロットウス あなたが理解されますように試みてみましょう。あなたがキリスト教徒の群衆を観察すると、彼らにとつて儀礼が人生の初めと終りではないでしょうか。⁽⁸⁹⁾ 洗礼式において執行された教会の古くて尊い典礼は、何と細心な配慮をもつてなされたことでしょう。幼い子どもは教会の戸口の外に待たされ、悪魔払いが行なわれ、信仰問答がなされ、誓願が果たされ、サタンがその華美と娯楽ともども誓いをもつて否認されます。ついに子どもの教育が配慮されるために、塗油が施され、「十字架でもつて」しるしづけられ、塩をふりかけられ、水に浸され（洗礼され）、保護者らに面倒を見るように依頼されます。彼らにはお金を支払われるので負担はかかりません。そこで、もう子どもはキリスト教徒と呼ばれますが、一応はそういうことになります。すぐにも彼には再び塗油が施され、ついに彼は信仰告白することを学び、⁽⁹⁰⁾ 聖体を拝領し、祝祭日には安息をとるように習熟し、聖祭に出席し、時どき断食し、肉食を控えます。そしてこれらのことを行なえば、必ずやキリスト教徒とみなされます。もし妻を娶るならば、別のサクラメントがそれに付与されます。聖職者となるならば、再び塗油が施され、聖別され、衣服が変えられ、祈祷が唱えられます。わたしは執行されているこれらすべてをもちろん承認しますが、それらが確信よりも習慣によつて執行されていることは是認できません。キリスト教にはそのほか何も加える必要がないという考えにわたしは断固反対します。というのは人びとの大部分が、こういうものに信賴している間に、それにもかかわらず、その間にも何とかして富を築くのに夢中になり、怒り・快楽・嫉妬・野望の奴隷となつて、ついには死の戸口にやつて来るからで

す。ここでも再び儀式が用意されています。一度もしくは二度の告白が適用され、終油が加えられ、聖体の秘跡が授けられ、神聖なローソクが手元に置かれ、十字架と聖水が準備されて、罪の赦しが告げられる。法王の証書が死に赴く者に示されるか、取得されます。豪華な葬儀が催されるように指定されます。厳粛な誓約が再度なされます。一人の者が死にゆく者の耳に大声で呼びかけます。いいえ、ときには、よく起ることですが、声もつと大きな人やかなり酒に酔った人がけしかけるならば、そのときが来る前に、人は死にます。これらのもの、とりわけ教会の慣習としてわたしたちに伝えられているものは、確かに役立っていますすが、それとは別に深く隠されたものがあつて、それは澁刺とした霊とキリスト教的な確信をもつてわたしたちがこの世から移住するように助けています。

エウセビウス あなたは敬虔に、かつ、適切にお話しになりましたが、その間に誰も食事に手を付けられておりません。それぞれ自分をごまかさないようにいたしましたしう。わたしはデザートのほか何も期待しませんようにと、あらかじめ申し上げました。それも田舎風のものでして、キジやヤマシギもしくはアツティカ風のデザートを誰もあてにしないためです。ボーイさん、これらを片づけ、残りの料理を食卓に運んでください。あなたがごらんになるのは豊饒の角91ではなくて、わたしたちの欠乏の角です。これはあなたがご覧になった小さな庭でできたものです。お好きなものがございましたら、ご遠慮なさらないでください。

ティモテウス とても多種多様なものですから、拝見しただけでも元気づけられます。

エウセビウス しかし、わたしが質素なのをあなたがすっかり軽蔑なさらないために、「わたしは主張します」この盛り皿が福音に生きた修道士ヒラリオンとあの時代に属する修道士仲間の百人を満足させていたことでしよう。それはまたパウロとアントニウスには一ヶ月間の糧食たり得たことでしよう。

ティモテウス 使徒たちの第一人者であるペトロも革なめし職人シモンのところに滞在していたとき、それを拒否しなかつたであろう、とわたしは思います。92

エウセビウス わたしの考えでは、パウロも貧窮に迫られテント製造人として夜じゅう絶えず働かされたとき、そのようにうでした。⁽⁹³⁾

ティモテウス わたしたちはこのことを神の慈悲に負っています。しかし身体における栄養の欠けが心の楽しみによって豊に埋め合わされるなら、わたしはペトロとパウロと一緒に空腹でいるほうを選びたいです。

エウセビウス むしろ、わたしたちは豊に暮らすことと貧困に苦しむことをパウロから学びましょう。⁽⁹⁴⁾ 欠乏しているときには、節約と忍耐の蓄えをわたしたちに供給してください。ご自身を愛するように促したもうお方の気前の良さに感謝するときには、その寛大さによってわたしたちを招き寄せ、ご自身を愛するように促したもうお方の気前の良さに感謝しましょう。また、神の慈悲が惜しみなく授けたもうものをわたしたちが控え目に、かつ、節約して享受するとき、わたしたちは貧しい人たちを忘れてはなりません。わたしたちに有り余るほどあるものが彼らには欠けるようにと、神はお考えなのです。それは両者のいずれも他に對して徳を実行する機会となるためなのです。実際わたしたちは豊に与えられていますから、それでもつて兄弟に欠けているものを助け、神のあわれみを獲ることができません。またわたしたちの施しによって元気を回復した貧しい人たちは、わたしたちのよい心情のゆえに神に感謝し、その祈りによつてわたしたちを神に推挙するでしょう。

ちようどよいときに思ひ出したことがあります。ボーイさん、ローストの残りをわたしたちのグドウラのところを持つていくように、わたしの妻に言うてください。彼女は隣人でして、妊娠しています。財布の中は乏しいが、心は至福です。彼女の夫は浪費家にして怠惰な人でしたが、少し前に亡くなりました。彼は多数の子どものほかは何も残しておりません。

ティモテウス キリストは乞い求めるすべての者に与えるように命じました。わたしがそうするならば、わたし自身が一カ月のうちに乞食となるに相違ありません。

エウセビウス キリストは必要なものを乞い求めている人たちのことを考えているとわたしには思われます。なぜなら乞い求める人たち、否、華麗な食堂を建築したり、もつと悪いことには、浪費や快樂を増大するために、多額の金銭をしつこくせがんだり奪い取る人たちには、その乞い求めるものを拒絶することが施しというものだからです。そればかりか、隣人のさし迫った困窮にあてるべきものを悪用しようとする者どもに施すことは強奪です。ですからキリストの生ける神殿の全体が、飢えによつて危険な状態に陥り、裸のゆえに身震いし、必要なものの欠乏によつて苦痛をなめているのに、過大な費用を投じて修道院や教会堂を建てたり飾つたりする人たちは、重い罪からほとんど解放されないわたしには思われます。わたしがイギリスにいたとき、聖トマスの墓が、信じられないほど豪華なものに加えて、無数の高価な宝石でもつて飾られているのを見ました。⁽⁹⁵⁾わたしはこの有り余るほどの富をいつの日か一度にすべてをひたたくる役人たちのために保存しておくよりも、むしろ貧しい人たちのために使うほうを選びます。わたしは墓を葉の多い枝と花でもつて飾りたいです。このほうがあの至聖のお方に喜ばれるとわたしは思います。ロンバルディアにいたとき、わたしはパヴィアからそう遠くないところで、あるカルトゥジア会の修道院を見ました。その中には教会があつて、内部も外部も、下から上まで、白い大理石でもつて建築されており、祭壇・柱・墓のような内にあるものはすべて殆ど大理石で造られている。少数の孤独な修道士たちが大理石の教会で「聖歌を」歌うためにこんなにも多くのお金が費やされるとはどういうことなのか。あの大理石の教会を単に眺めるためにだけ当地を訪れる他国の人たちによつて絶えず侵略されていますから、この教会は彼ら自身にも重荷であつて、役立つていません。

それに加えて、わたしはもつと愚かなことを当地で知りました。修道院を建設するために毎年三千ダカットのお金が遺産として贈られています。また遺言者の意志に逆らつて神意に適つた使用にそれを転用することはできないと考える人たちがおります。彼らは企てることを建設しないよりも打ち壊す方を選ぶでしょう。これらの事実が際立っておりますので、わたしは記憶に留めるべきだと考えました。とはいえ、わたしたちの教会でもそれと似た多くの実

例があちこちにあります。このようなことは、わたしには施しではなく、名譽心に思われます。富める者たちは教会の中に自分たちの記念碑を建てようと努めますが、教会の中には以前は聖者のための場所はなかつたのです。彼らは〔石の中に自分の姿が〕刻まれ、描かれるように、それに彼らの名前と功勞の記録が書き加えられるように配慮します。そしてこういったものでもって彼らは教会の大部分を占領します。彼らの屍が祭壇に設置されるように要請されるときが来ると思われます。

彼らの気前よきは退けられるべきでしょうか、とだれかが言うかもしれません。彼らが提供しているものが神の教会にふさわしいなら、決してそうではありません。しかし、もしわたしが司祭か司教でしたら、わたしはあの頭の鈍い廷臣たちや商人たちに、彼らが自分たちの罪が神の前で赦されるのを願うなら、本当に貧しい人たちを援助するために秘かに喜捨するように促すことでしょう。この人たちの考えでは、お金が細分されて秘かに卑賤な人たちのさし迫った困窮を支援すべく分散されるならば、その記念碑が子孫に残らないので、お金は失われてしまうのです。わたしが思うに、キリストご自身がもつとも信頼のおける債務者として自分に請求されることを欲しておられることよりも良い出資先はないのです。

ティモテウス 修道院に授けられているものは正しく役立てられていると思いませんか。

エウセビウス わたしが金持ちであるならば、修道院に多少は与えますが、それも奢侈のためでなく、必要なもののために与えたいです。わたしは彼らの中で真の宗教の研究を活発にしていると想われる人たちに与えたいです。

ティモテウス 大抵の人たちは、普通の乞食にお金を与えることは、少なくともそれがよく運用されているとは思いません。

エウセビウス 彼らにもときには多少は与えられるべきですが、それもよく選んですべきです。国はそれぞれその民を養つても、あちこちと放浪している者どもを黙認しないほうが賢明であると思われます。とくに健康な人たちはそう

であつて、彼らにはお金よりも労働を与えるべきだと思います。

ティモテウス それでは主として誰に、どの程度、また何回ぐらい、与えられるべきだとお考えですか。

エウセビウス それをきわめて正確に規定することはわたしにとつて困難でしょう。まず第一にすべての人を助けようと欲する気持ちが備わつていなければなりません。次に、その機会が訪れるたびに、とりわけその人の貧しさと誠実さをわたしがよく知っている人たちには、わたしの貧弱な財産に応じて、できるかぎり寄付します。わたしに蓄えがないときには、他の人たちに慈善を勧めます。

ティモテウス しかし、あなたはわたしたちがこのあなたの所有地で何も隠さないで語ることをお許しになりますか。

エウセビウス そうですとも、あなたがたがお宅におられるときよりも開放的にお話してください。

ティモテウス あなたは教会のために過度に消費することを認めておられません。それですから、あなたはこの住宅をずっと小さく建てることがおできになりました。

エウセビウス 確かにこれは中くらいの程度にはきれいにできていると思います。もしお望みなら、優雅とも言えましょう。わたしが欺かれていなければ、贅沢ではないことは確かです。物乞ひして生きる人たちもつと豪華に建築します。とは言つても、このわたしの庭園はどうあつても、困窮してゐる人たちに使用料を支払わねばなりません。そしてわたしは自分と家族に対してはさらに儉約を守り、毎日の費用からいくらかを引き出して、貧しい人たちにいつそう施すことができるようにしています。

ティモテウス すべての人があなたのような精神をもつならば、現在不当な困窮に苦しんでゐる非常に多くの人たちは暮らしがよくなるでしょう。他方、困窮が教えるであろう節制と控え目を学ぶようになると、太つた多くの人たちは減少するでしょう。

エウセビウス おそらくそうですね。だが、あなたがたはわたしたちがこの味のないデザートに何か甘味料を加える

のを願っていますか。

ティモテウス わたしたちは美味の点で十分に満足しています。

エウセビウス でも、わたしはお腹が一杯になっていても、あなたがたがお断りにならないものをここにもつてきます。

ティモテウス それは何ですか。

エウセビウス 福音書の写本です。食事の終りにわたしが所有しているもつとも高貴なものをあなたがたにもつてきましょう。ボーイさん、あなたが前の食事のとき読み終わった箇所を朗読してください。

ボーイ 「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方を支持して他方を軽んじるか、どちらかであるから。あなたは神と富とに仕えることはできない。だから、わたしはあなたがたに言うておく。自分の命のことで何を食べようか、また自分の体に何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物に優り、体は衣服に優るではないか」(マタイ六・二四〜二五)。

エウセビウス 書物をお返しください。この箇所イエス・キリストはわたしに二度同じことを語ったように思われます。というのは最初にイエスが語ったこと「憎むでしょう」の代わりに、「彼はすぐに「軽んじるでしょう」を置いており、最初に要請したこと「愛するでしょう」の代わりに、すぐに「支持するでしょう」を当てているからです。人物が入れ替わっても意味は同じままです。

ティモテウス あなたの仰りたいことをわたしは充分には理解できません。

エウセビウス それでは、お望みとあれば、数学的方法によってそれを明らかにしましょう。初めの部分ではあることの代わりにAを、他のことの代わりにBを置きます。それに対し第二の部分では逆の順序でもつてあることの代わりにBを、他のことの代わりにAを置きます。実際、彼はAを憎み、Bを愛するか、それともBを支持し、Aを軽んじ

るかのどちらかになるでしょう。Aは二度憎まれ、Bは二度愛されるということが、これでもって明らかではないですか。

ティモテウス 全く明瞭です。

エウセビウス 「それとも」という接続詞は、とくに反復されると、対立した意味や相違した意味を強調します。もしそうでないと、「ペトロはわたしに勝つでしょう、そしてわたしは譲歩するでしょう。それともわたしは譲歩するでしょう、そしてペトロはわたしに勝つでしょう」と言うのは無意味ではないでしょうか。

ティモテウス 愉快なこじつけです。神よわたしを助けたまえ。

エウセビウス このことをわたしがあなたから学べるなら、わたしにもそれが愉快に思われるでしょう。

ティモテウス わたしの精神は夢を見ており、わたしの知らないものによつて産みの苦しみをしています。あなたが命じられるなら、それが何であれ、あなたに知らせましょう。そうすれば、あなたは夢を解く人か、助産婦になることでしょう。

エウセビウス 食事のときに夢を想起することは、一般には不吉なこととみなされておりますし、こんなにも多くの人びとの前で子を産むということは上品なことではありませんが、それでもわたしたちは、あなたの夢を解くか、あるいはあなたが欲せられるなら、あなたの精神が孕んだものを喜んで採りあげましょう。

ティモテウス この発言の中では人物よりも行動のほうに変化しているようにわたしには思われます。「一方を……：他方を……」という表現は（人物としての）AとBに関係しません。そうではなく表現の両方の部分は双方の任意のものと関係しています。ですから、あなたが両方の中から撰ぶものは、今や、他方によつて指示されるものに対立させられます。そのさい「あなたは〔任意の事柄〕Aを排斥してBを許容するか、Aを許容してBを排斥するかです」とあなたは主張しているかのようにです。ここでは人物がそのまま、行動が変化していることがあなたにはお分かりで

す。またAについてあなたは「同じことをBについても次のような仕方でも何ら差し障りがない。つまりへあ
なたがBを排斥し、Aを許容するか、Bを許容し、Aを排斥するかでしょう」と言われます。

エウセビウス 確かにあなたは問題点をわたしたちに巧みに説明してくださいました。どんな数学者でもそれより上手
に砂の上に描いて説明しなかつたことでしょう。⁽⁹⁶⁾

ソフロニウス パウロ自身が生活の資を獲るためにその手でもって労働に励んだし、同じく仕事に従事しない閑人たち
や他人に頼って生きるのを喜んでいる人たちを厳しく非難したのですから、明日のことを思い煩うなど命じられてい
ることにわたしはむしろ困惑しております。彼は人びとが労働するように、また手を動かして何か良いものを造るよ
うに忠告しています。それは彼らが貧しい人たちに必要なものをそこから分ち与えるものを獲るためなのです。⁽⁹⁷⁾ 貧弱
な夫が最愛の妻とかわいい子どもたちを養う労働は、敬虔にして神聖なものではないでしょうか。

ティモテウス わたしの意見では、この問題はさまざまな仕方でもって答えられます。第一に、とくにその時代と関連
して解くことができます。福音の宣教のために遠く出かけていった使徒たちは、どこから供給されようと、生活に必
要なものに対する心配から解放されなければなりません。彼らには手仕事によって食物を獲る時間の余裕があ
りませんでした。とくに漁業のほかには生きる手段を何も知らなかつたときには、そうでした。だが、今や、時代は
変わりました。そしてわたしたちは暇な時間を充分にもつており、労働をまぬがれています。

第二の解決策はこうです。キリストは勤勉ではなくて心配することを禁じています。彼は心配することのもつとで、
人びとの通常の感情を理解しています。彼らは生活に必要なことを調達することのほかには何も心配を感じないで、
万事を棄ててこれだけに関わり、この一つの心配事のみを追求しています。わたしたちの主ご自身は、同じ人が二
人の主人に仕えることができるということを否定されたとき、そのことをほぼ主張されています。と言うのは全身
をもつて献身している人が仕えているからです。したがって主は福音を広めることへの配慮がもつとも大切であると

願われていますが、それが唯一の配慮ではありません。実際、主は「何よりもまず、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えてあなたがたに与えられる」（マタイ六・三三）と言われます。単に「求めなさい」とだけ彼は言われるのではなく、「何よりもまず、求めなさい」と言われます。そのほかに「明日のこと」とあるのは、それが遠い未来を意味していますから、誇張法であると思います。この世のことを渴望する習わしの人は未来のことを思い煩い、「それに備えて」探し求めています。

エウセビウス あなたの解釈をわたしたちは受け入れますが、「何を食べようと、魂のことを思い煩うな」（マタイ六・二五）と主が語ったのはどうしてなのか。身体は衣服をまといっていますが、魂は食べたたりしません。

ティモテウス わたしが思うに魂という語はここでは命のことを指しています。命は食物が取り去られると、危険な状態に陥ります。しかし衣服が取り去られても危険ではありません。衣服は必要よりも恥のために与えられています。だけれど裸によって害を受けても、すぐには死にませんが、食を断つことは確実に死となります。

エウセビウス わたしにはこの文章とそれに続く「魂は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切である」（同）と語られていることがどのように関連しているのか全く分かりません。もし命に大いなる価値があるなら、それが失われないようにますます警戒すべきです。

ティモテウス このように論証する議論はわたしたちの心配を取り除かないで、むしろ増大させます。

エウセビウス しかし、あなたの解釈はキリストの考えではありません。この議論によってキリストはわたしたちの御父に対する信頼を増加させています。もし慈しみ深い御父が無償で、かつ、自発的にいつそう高価なものを与えてくださったならば、もつと安価なものをそれに付け加えてくださるでしょう。魂を与えてくださったお方は、食物を与えるのを拒絶なさらないでしょう。体を与えたお方は、衣服をもどこからか付け加えてくださるでしょう。したがって彼の親切に信頼するわたしたちは、些細なことに対する心配や配慮によって苦しめられる理由がないのです。それ

ゆえ、わたしたちの配慮と熱意との全体を天上の事物に対する愛へと転換し、サタンとその策略と一緒に地上の富をことごとく退け、心を尽くし澆刺とした精神でもって、その子らを見捨てることのない神にのみ仕えるならば、わたしたちがこの世を用いないかのように使用することのほかには何が残るのでしょうか。

ところでこの間にだれもデザートに触れられておりません。とにかくそれを味わってみてください。それは家でわたしたちのために作られたものですから。

ティモテウス わたしたちのひ弱な体のことを言うともう十分に満足しております。

エウセビウス あなたがたの精神のほうもそうであることを願っています。

ティモテウス しかも、わたしたちの精神はいつそう豊に満たされております。

エウセビウス それでは、ボーイさん、これを下げてください。ボウルをもつてきてください。友よ、この食事で犯したかも知れない落ち度があるなら、清められて、神への讃歌を唱えるために、手を洗いましょう。もしよろしければ、クリュソストモスから始めたものを完成させたいのです。

ティモテウス どうぞそうなさってください。

エウセビウス 「主よ、あなたに栄光がありますように。聖なるあなたに、あなたに栄光がありますように。王よ、あなたに栄光がありますように。あなたはわたしたちに食物を与えてくださいましたから。聖霊によつてわたしたちに歓喜と楽しみを満たしてください。それは、わたしたちが御目の前に受納される者として見いだされ、あなたが各々にそのわざにしたがつて報いたもうとき、恥を受けないためなのです」⁽⁹⁸⁾。

ボーイ アーメン。

ティモテウス この讃歌は全く敬虔で、完全無欠なものです。

エウセビウス 聖クリュソストモスはこの讃歌が解釈されることも拒絶されないうでしよう。

ティモテウス どの箇所ですか。

エウセビウス マタイ福音書の説教五六です。

ティモテウス わたしは今しがた読んだ箇所も省略したくありません。ところで、あなたから学びたいことが一つあります。どうして三度、しかも「主」・「聖なるお方」・「王」という三重の名称でもってキリストの栄光のために祈るのでしょうか。

エウセビウス それはすべての栄光がキリストに帰せられなければならないとくにわたしたちは三重の名称によって彼を誉め讃えなければならぬからです。まず、彼のとても神聖な血潮によつてわたしたちが悪魔の暴政から贖い出され、彼に属するものとしてくださったからです。それゆえにわたしたちは彼を「主」と読んでいます。次に、彼はわたしたちのすべての罪に対する赦しを無償で与えたことで満足しないで、その聖なる霊によつてわたしたちに彼の義をも授けてくださったからです。それはわたしたちが彼の神聖さを追求するためなのです。また、このゆえにわたしたちは彼のことを「聖なるお方」と読んでいます。それは彼がすべてのものを聖化させるお方であるからです。最後に、わたしたちは同じお方から天国の報奨を期待するからです。彼は、今、天国で御父の右に座しておられます。ですから、わたしたちは彼を「王」と呼ぶのです。そして、わたしたちはこれらのすべての至福をわたしたちに対する彼の無償の恩恵に負っています。こうして悪魔を主人や暴君としてもつ代わりに、わたしたちはイエス・キリストを主人としてもっていますし、諸々の罪の不潔や汚れの代わりに潔白と至聖を、ゲヘナ〔地獄〕の代わりに天上的生命の喜びをもっています。

ティモテウス 確かに敬虔なお考えです。

エウセビウス 今回はあなたがたをお食事に招待した最初のことですから、わたしは贈り物なしにあなたがたを去らせたくありません。それも饗応にふさわしいような贈り物をしたいです。——おい、ボーイさん、お客様に差し上げ

る贈り物をもつてきなさい。――籤を引くか、好きなものを選ぶか、好きなようにしてください。何の違いもありません。すべては同じくらい価値ですから。つまり何の価値もないのです。ある人に百頭の馬が当たったり、他の人には同数の蠅が当たるような、ヘリオガバルスの籤ではありません。ここには四冊の書物と二つの時計と小さなランプとメンフィティクスのペンの入った箱があります⁽⁹⁹⁾。これらのものはバルサム樹液や歯磨き粉や鏡よりもあなたのために適合していると思います。

ティモテウス それはすべて全く素晴らしいものですから、わたしたちが選ぶのは難しいです。むしろ、あなたご自身のお考えにしたがってそれらを割り当ててください。そうすれば、どんなものを受け取っても、感謝を深めることでしょう。

エウセビウス この羊革の小さな本にはソロモンの箴言が入っています。それは知恵を教えますが、金箔が施されています。金は知恵のシンボルだからです。これはわたしたちの白髪の友に贈られます。こうして知恵が福音的な教えにもとづいて知恵をもっているお方に授けられて、それは豊に溢れることでしょう⁽¹⁰⁰⁾。

ティモテウス わたしはきつと知恵に欠けることがなくなるように努めるでしょう。

エウセビウス とても遠隔の地ダルマティアから輸入されたこの時計は、わたしはこのように言つてささやかな贈り物を推奨しているのですが、ソフロニウスにふさわしいでしょう。というのは、わたしは彼がどんなに時を惜しんでいるかを、このもつとも高価な宝のどんな小さな部分も、実りをもたらしきないでは、決して過ぎ去るのを許さないのを、知っているからです。

ソフロニウス いいえ、そうではありません。あなたこそ怠惰な者が勤勉であるように忠告しておられるのです。

エウセビウス この羊革の小さな本にはマタイによる福音書が入っています。この本にとつて人間の心よりも大切な箱やカバーがないとしたら、それは宝石でおおわれるに値していたでしょう。テオフィルスよ、心にこれを保管してお

きなさい。それによつてあなたの名前にますます似るようになってください。⁽¹⁰⁾

テオフィルス あなたが全く無駄な贈り物をして損をしたと思われないうように励みましよう。

エウセビウス ここにはパウロの手紙があります。エウラリウスよ、あなたはいつもパウロを引用しておりますから、

喜んでこれを携えて歩かれるでしょう。パウロがあなたの心の中にないならば、「その言葉を」口にもしませんように。

そうすれば、彼はあなたの手と目においてももつと役立つようになるでしょう。

エウラリウス これでは贈り物を与えるのではなく、忠告を授けることになります。ところが良い忠告よりも高価な贈り物はございません。

エウセビウス 小さなランプは飽くことのない読書家にしてキケロが言うように書物の大食漢であるクリュソグロットゥスにふさわしいでしょう。

クリュソグロットゥス 二重に感謝します。第一に、並はずれた上品な贈り物に対して、第二に、怠惰な者が眠らないようにご注意ください。第二に、並はずれた上品な贈り物に対して、第二に、怠惰な者が眠らないようにご注意ください。

エウセビウス 筆箱はとも恵まれた多作家⁽¹¹⁾であるテオディダクトゥスがふさわしい。また、わたしが思うに、これらの筆は、それによつてわたしたちの主イエス・キリストの栄光が、とりわけこのような巨匠によつて、誉め讃えられるなら、もつとも祝福されたものとなります。

テオディダクトゥス あなたが筆記具に与えてくださったように、心をも助けてくださいますように。

エウセビウス この書物はプルタルコス『道徳論集』の中からいくつかの短い作品を集めたもので、選集となつており、ギリシア文学に熟練した人によつて巧みに写し取られています。その中にとつても大いなる聖性が見いだされますので、異教徒の精神のなかにそのような福音的な思想が入ってきていることは、わたしには奇跡のように感じられるのです。これは若いヘレネス〔ギリシア主義者〕のウラニウスに贈られるでしょう。時計が残っていますが、これは

ネファリウスに譲渡します。彼はとても節約して時間を使っていますから。

ネファリウス わたしたちは贈り物に感謝するばかりか、「人物を鑑定した」諸々の証明書にも感謝します。というのは、それはお世辞ほどには贈り物を分け与えてくれませんかから。

エウセビウス むしろわたしはあなたがたに二つの理由で感謝します。第一に、あなたがたがわたしの質素な生き方によく対処してくださったことに対し、第二に、教養があり、同時に敬虔な会話をとおしてわたしの精神を活気づけてくださったことに対し感謝します。わたしはあなたがたがどのようになるときをお過ごしになったかを知らないままにお別れしますが、わたし自身は少なくともより良く、かつ、いつそう賢明になってあなたがたとお別れするでしょう。わたしはあなたがたにとって笛や道化師が好ましかったり、ましてやサイコロ遊びが好きでないのを知っています。ですから、よろしければ、わが王宮の他の不思議なものを見ることで少し時間を使いましょう。

ティモテウス わたしたちも丁度あなたにそれをお願いしようとしていたところですよ。

エウセビウス 誠実に約束を果たす人に対しつくく求める必要はありません。あなたがたはこの夏向きの庭をもう充分ご覧になったと思います。これは三つの眺望をもっておりまして、どちらを向かれましても、庭のとても気持ちよい緑に出会えます。霧とか風が不快ですと、動かすことができるガラス窓によって、もしよろしければ、空気が入ってくるのを防ぐことができます。暑熱のようなものがあなたがたを不快にすると、外から厚いシャッターを、内部から薄いカーテンを引くことよって、太陽を閉め出すことができます。ここで昼食をとっていると、家ではなく、庭で食事をしているように思われます。というのは庭の緑の花を散りばめており、良い絵もありますから。「見てください」ここでキリストは選ばれた弟子たちとともに最後の晚餐をとられます。ここではヘロデが不吉な酒盛りでもって誕生日の祝いを挙行しています。ここでは、すぐにも地獄に堕ちる、あの福音書にある金持ちが華やかに食事をしています。すぐにアブラハムの懐に受け入れられるラザロが門から追い出されています。

ティモテウス わたしたちはこの題材を充分には理解していません。

エウセビウス それはクレオパトラがアントニウスと一緒に放蕩を競い合っているところです。彼女はもう真珠を呑み込んでおり、もう一つ取ろうと手を差し出しています。ここではラピタエ族が戦っています。ここではアレキサンダー大王が槍でもってクリトスを突き刺しています。これらの実例は食事における節制を勧め、醜陋と奢侈を撃退しております。では、図書室に行きましよう。それは多くの書物ではなく、選り抜きの書物を備えております。

ティモテウス この場所には何か神祕的なものがありありと示されております。ですからすべてが輝いています。エウセビウス ここにはわたしの財産の優れた部分があります。テーブルの上にはガラスと錫の食器しかありません。家のどこにも、金箔をかぶせた一つの杯のほかには、銀製の器もございません。この杯は贈り物としてわたしにくださった方への愛から恭しく保存しております。ここに掛かっている球体は全世界をあなたがたの目の前に示しています。壁のここにはすべての地域が拡大されて描かれています。壁の他のところには重要な著者たちの肖像が見られます。彼らのすべてを描くことはきりがありません。山上に座して手を出しているキリストが第一位の場所を占めています。頭上には御父がおられて、「これに聞け」と語っています。翼を広げた聖霊は光をたくさん注いで彼を抱擁しています。

ティモテウス アペレに相應しい作品です。⁽¹⁰⁶⁾ そのようにわたしをお助けください。

エウセビウス 図書室に隣接しているのは書齋で、狭いのですが素敵です。何か寒いと感じられる場合、この板を動かすと、中から炉が出てきます。夏には頑丈な壁に見えます。

ティモテウス このすべては寶石でできているように思われますし、とても快適な香りもしています。

エウセビウス 家がきれいで良い香りがするようにとくに努めています。両方を行なっても費用はかかりません。図書室には庭を見わたせる、バルコニーが付いています。庭には礼拝堂が隣接しています。

ティモテウス 神性に適した場所ですね。

エウセビウス では、家の中庭に面している開廊の上にある三つの画廊に行きましよう。これらの画廊からは両サイドが見わたせますが、締めることができる窓によって、とりわけ中庭に面していない壁によって家はいつそう安全に保たれています。この右手には、ずっと明るくなつていて、壁も窓によって切り離されていないので、イエスの生涯が、四福音書の物語からはじめて聖霊の派遣と使徒言行録にある使徒たちの最初の宣教に至るまで、順序にしたがつて描かれています。どのような池の傍らで、あるいはどんな山の上で出来事が起つたかを見る人に分かるように、場所を示すしるしも付けられています。さらに物語の全体を要約する短い説明文、たとえば「よろしい、清くなれ」(マタイ八・三二)といったイエスの言葉が付けられています。反対側にはそれに対応する旧約聖書の人物や預言が、とくに預言者たちと詩編から取られて並んでいます。それらはイエスと使徒たちの生涯を別の言葉で述べたものにほかなりません。ここをわたしはしばしば逍遙し、自分と語らい、その御子によって人類を回復なさうとした、言い表しがたい神の計画について黙想します。時には妻や信心深い事柄を喜ぶような友人がわたしに付き合ってください。

ティモテウス この家の中でだれが飽きるでしょうか。

エウセビウス 自分とともに生きることを学んだ人はだれもそうはならないでしょう。⁽¹⁰⁷⁾ 絵の最上位には、系列の外にあるかのように、ローマ教皇の胸像が名前と一緒に加えられています。その反対側には皇帝たちの胸像が歴史を憶えるために並んでいます。「画廊の」両方の隅には張り出した小部屋が付いています。そこで人は休んだり、そこから果樹園やわたしの小鳥たちを眺めることができます。⁽¹⁰⁸⁾ 牧場の遠くの辺鄙なところに小さな建物が見えます。そこでわたしたちは時折夏の食卓を囲みますし、家族のどれかが恐ろしい感染病にかかると、そこで看病します。

ティモテウス ある人たちはこのような病気は「隔離して」避けるべきであるということを否定しています。

エウセビウス それではどうして彼らは落とし穴や毒を避けるのですか。それとも、彼らはそれを見ないがゆえに、恐れることが少ないのでしょうか。目から放射されるバシリクスの毒は目に見えません。⁽¹⁰⁾ 状況が全く変わつて必要とあれば、わたしは生命に危険を冒すことを躊躇しません。理由なしに生命の危険を冒すことは無謀というものです。他人の生命を危険に引き込むのは残忍というものです。

その他にも見る価値あるものがございます。妻に命じてそれらをお見せするようにしましょう。これから三日間ここに滞在してください。そしてこの家をご自身のものとお考えください。目を喜ばせ、心を楽しませてください。というのはわたしは他のところで仕事がありますから。いくつかの隣村に馬で行かなければならないのです。

ティモテウス 金銭問題のためですか。

エウセビウス わたしは金銭のためにそうした友人たちを見殺しにすべきではありません。

ティモテウス 多分どこかで狩猟がじゅんびされているでしょう。

エウセビウス 確かに狩猟はありますが、わたしは猪や牝鹿とは違うものを狩りにいくでしょう。

ティモテウス それは何ですか。

エウセビウス お話ししましょう。ある村では友人が危険な状態で臥せています。医者は体のことを怖れています。が、わたしは彼の魂のことが心配です。というのは彼はキリスト教徒にふさわしくこの世を去っていく準備がほとんどできていませんから。彼が死ぬにせよ、回復するにせよ、彼の善となるように激励すべく彼を訪ねるでしょう。別の村では二人の人の間で不和が生じています。彼らは悪い人たちではないのですが、強情な質たての人たちなのです。紛争がひどくなると仲間の多くが激しい反目に引き込まれるのではないかと心配です。わたしはこの人たちを和解させるように全力を尽くして努めるでしょう。なぜなら、わたしは両者と昔から友好関係を結んでいるからです。こういったことを獲ようとわたしは狩りをしています。もしこの狩りがわたしの望みどおりに成功するなら、直ちにここ

めでたしめでたしと祝いましょう。(10)

ティモテウス 実に信仰的な狩りです。デリアではなく、キリストがあなたに恵みを授けたもうように祈りましょう。
エウセビウス 二千ダカットの遺産が与えられるよりもそのほうびを取りたいです。

ティモテウス すぐにごにお帰りになりますか。

エウセビウス すべてを試みてみるまでは帰りません。ですから、そのときをはっきり決めることができません。あな

たがたはその間にわたしのものをあなたがたのものと同じように享受してください。ごきげんよう。

ティモテウス 主イエスがあなたを豊に導きたまい、連れ戻してくださいますように。

注

- (1) よく使われる警句、『格言集』1:2,4 参照。
- (2) エラスムスは高利貸を好まなかったが、貪欲な商人よりはましだと考えている。『格言集』1:9,12 参照。
- (3) プラトン『パイドロス』230D 参照。
- (4) エラスムスの『エピクロス派』108f: 30-1085:9 参照。同じ考えをウイリアム・ペンは次のように言う、「田園は哲学者の庭園にして図書室である。そこで彼は読書し、神の力・知恵・善良さを熟考する」(『孤独がもたらす実り』1683, no.223) と。
- (5) ホラティウス『抒情詩集』2, 48
- (6) ルキアース『真の物語』2, 13-14
- (7) その数は9を指す。

- (8) 『格言集』II, 7, 69 参照。これはソクラテスの発言とされている。
- (9) リンケウスは伝説上の人物でアルゴ―船の乗組員であつて、岩や木を通して見る事ができたとされる。『格言集』II, 1, 54 参照。
- (10) マルコ七・三四参照。
- (11) 本文はギリシア語とヘブル語の原典から引用されている。
- (12) プレアプスはローマの肥沃を司る神にして、その像が置かれている、ぶどう園と庭園の神である。「とても汚らわしい」と形容されているのはこの神が男根と一緒に描かれているからである。『格言集』III, 3, 63 参照。この神の代わりにイエスを置いたことにルターは怒りを発している (Luthers Werke in Auswahl, Bd. 8, S. 243 (CL.))。
- (13) エピクロスはアテネの庭でしばしば教えたので、彼の信奉者たちは庭の哲学者たちとして知られていた。ディオゲネス・ラエルティウス一〇・一〇・五七参照。
- (14) テレンティウス、『フォルミオ』454、『格言集』I, 3, 7 参照。
- (15) 「開廊」ambulacra は元来は「散歩道」の意味であるが、この庭園には散策できる涼み廊下があつて、その上にはギヤラリーが設置されている。後にお客はここに案内される。
- (16) 「アテナイのフクロウ」とあるのは、アテナイ人にとって夜のフクロウは神聖なものであつたからである。それが飛ぶのは幸運な前兆であり、勝利のシンボルであつた。『格言集』I, 1, 76 参照。
- (17) 原文はギリシア語である。
- (18) 『格言集』III, 7, 1 参照。
- (19) 「ツバメのひな鳥」についてはプリニウス『博物誌』25, 89 参照。
- (20) 「カメレオン」は気まぐれ、移り気、貪欲のシンボルである。『格言集』III, 4, 1 参照。
- (21) このカメレオンは空気で養われており、追従のシンボルとなっている。プルタルコス『道徳論集』33D およびプリニウス『博物誌』8, 122 参照。
- (22) プリニウス『博物誌』によるとカメレオンはいつも野生のイチジクの木の辺りにいる。
- (23) 何か滑稽なほど当たっていないことに使う言葉。『格言集』II, 7, 66 参照。

- (24) 「格子ごしに見た」というのはIコリ一三・一二の言い換えて、これが格言であるかどうかは疑わしい。エラスムスは『格言集』III, 1, 49でこれを格言とみなしているが、キケロ『雄弁家』I, 123からの単なる引用である。
- (25) 「ヘレボルス」については『格言集』I, 8, 51とプリニウス『博物誌』25, 48-61参照。
- (26) 原文はギリシア語で、テオクリトウス10, 17からの引用。『格言集』II, 6, 11参照。
- (27) これににらまれると命取りになると思われる。その吐く息は石をも砕く。プリニウス『博物誌』8, 78, 29, 66参照。「バシリスク」というのはギリシア語のバシレウスⅡ王に由来する。それゆえ、続く文章で「王のような」という発言が出てくる。
- (28) キケロ『義務について』I, 28, 97, 『格言集』1882 (LB, II, 676D) 参照。これは暴君について著作家が好んで使った言葉である。この格言はキケロ『義務について』I, 97, 2, 23からにセネカ『寛容について』I, 12, 4にも使われている。
- (29) 箴言六・六「なまけ者よ、蟻のところへ行き そのなすことを見て、知恵を得よ」。
- (30) ホラティウス『風刺詩』I, 1, 32, 4。
- (31) プリニウス『博物誌』II, 111参照。
- (32) ポリプはイソギンチャクやヒドラなどを指す。
- (33) 原文はギリシア語。プリニウスは貝が蛸に勝つさまを描いている(『博物誌』9, 90)。
- (34) 「リブルニヤ船」とはアドリア海で使用された高速の船を言う。プリニウス『博物誌』10, 63参照。
- (35) シビレイは体板両側に発電器官があつて電気を発する魚。プリニウス『博物誌』9, 144参照。
- (36) 「裏戸」(posticum) については『格言集』IV, 6, 52参照。
- (37) 「アルキノウス王」はフェニキアの王で素晴らしい宮殿と庭をもつていた。オデュセウスは彼のもてなしを受けた(ホメロス『オデュセウス』巻67参照)。
- (38) 『格言集』I, 6, 27にあるように食卓とそこで饗される食事は神聖なものであった。プルタルコス『道徳論集』279E参照。
- (39) クリュソストモス、「マタイ福音書」一六・二四による説教(第五五)、『ミニニュー編』ギリシア語著作全集』58, 545。
- (40) この箇所から四三頁一八行までが本対話編の主要部分をなしている。
- (41) プリニウス『博物誌』序文Bと参照。エラスムス自身も散歩のときにキケロの『義務について』『友情について』『老年に

ついで』を携えていたという記述がある(手紙 1013, 26-31 参照)。

- (42) エラスムスによると学問は少数の人に許されているが、敬虔な信徒になることはすべての人に許されている。「この種の哲学は三段論法の中よりも心情の中であり、論争ではなく生活であり、博識ではなく靈感であり、理性よりも生の変革です。学者になることは少数の者にとって辛うじて成功しますが、キリスト者であることや敬虔であることは誰にでもできるのです。私はあえて付言したい、神学者であることは誰にでも可能なことです」と(D. Erasmus, *Ausgewählte Schriften*, Bd. III, S. 12, 22-24.)。

- (43) エラスムスの『手紙の書き方について』ではこれを格言として引用している(ASD I-2, 339; CWE25, 88.)。

- (44) 「神的狂気」についてプラトン『国家』9,577E, および『格言集』II, 8, 54 参照。

- (45) 「アケロウス川」はギリシアの最長の川。オヴィディウス『変身物語』8, 547-61 参照。

- (46) 格言のように用いられている言葉で、出典はアイスキュロス『アガ멤ノン』717-36, 『格言集』II, 3, 77 参照。

- (47) 「手始めの食事」(ova) と訳したのは「卵」(Ovum) から食事が始まるからであるが、それは「凱旋式」「喝采」をも意味する。

- (48) 「影」は招かれざるお客のことを指す。それは影武者のような存在であるが、招かれないのに宴会に出かけるのは英雄にふさわしいとプラトンが言った故事に倣っている(『饗宴』174C 参照)。

- (49) 『格言集』II, 4, 93 参照。「問題に適中する」とか「正確に要点をつく」「凶星をさす」などを言う。

- (50) 「沈黙の人」『格言集』I, 10, 78, 「世俗の宴席」に出席した婦人は沈黙するのと同じである。

- (51) ここには philosopher という用語が使われている。この「哲学する」という用語はカントの『純粹理性批判』(B, 866) で意義深いものとして考察された。

- (52) 「クサンツッチェ」はソクラテスの妻、彼女についてはプラトン『ソクラテスの弁明』を参照。

- (53) テレンティウス *Adelphi* 43-4, 『格言集』IV, ii, 35 参照。

- (54) 箴言一八・二二、一九・一四

- (55) 「結婚生活」という対話ではある婦人が、夫が悪いとその妻に通常欠陥があると言われた(エラスムス『対話集』二宮敬記「世界の名著」エラスムス、トマス・モア、二二九頁)。さらにトマス・モアがその妻をどのように訓育したかが語られる

(エラスムス前掲訳書二五八頁と注(2)参照)。

- (56) II テモテ三・一六からの引用。「神から靈感を授けられて」はギリシア語で書かれている。
- (57) 神は霊であるから、霊的なささげものを喜ばれるという意味である。De concordia LB V 486F 参照。
- (58) マタイ九・一〇—一三
- (59) マタイ二二・三七—四〇
- (60) マルコ七・一一—四
- (61) 『神学の正しい方法』(LB V 128A-C) でエラスムスはオリゲネスとアウグスティヌスの例を挙げて、不明瞭な聖書のテクストは他のテクストとの比較によって明らかにするのが最良な方法であるという。
- (62) イザヤ一・一一—一七
- (63) 自然法によって守るよう命じられているものについてロマ二・一四—一五参照。
- (64) コロサイ二・一六—一七、ヘブライ一〇・一一—一〇
- (65) 「施し」eleemosyna はギリシア語のἐλεημοσύνηであり、それはἐλεεινός「憐れみを示す」に由来する。
- (66) パリの神学者たちはこの文章がルターの主張と一致するがゆえに反対した。それに対しエラスムスはそれが真理であるから、万人の見解に一致すると回答した(LB IX 333C-D)。つづく発言はルターとの相違を示している。
- (67) これは「人間の道は自分の目に正しく見える。主は心の中を測られる」(箴言二二・二) という言葉の解釈であると思われる。
- (68) 身体を精神の宿る墓であるという考えはオルフィックの影響を受けたプラトンに由来する。
- (69) 『格言集』II, 2, 65 参照
- (70) カルメル会はカトリック教会の托鉢修道士の厳格な会派の一つである。
- (71) ラテン語の格言『格言集』III, 6, 34.
- (72) ギリシア語の格言『格言集』I, 7, 17.
- (73) エラスムスの考えはプルタルコス『道徳論集』353A-C、『エジプト神イシスとオリシスの伝説について』(De Iside et Osiride) 柳沢重剛訳、岩波文庫にもとづいている。

- (74) Iコリント八・一一三、一〇・二七―三三
- (75) Iコリント一〇・三二―三三
- (76) パリ大学の神学部はこれに反対した。これに対するエラスムスの返事はLB, IX, 935B-Dを参照。
- (77) Iコリント六・一一一〇「教会で疎んじられた人びと……」
- (78) 同六・一三
- (79) Eulaliusという言葉は「よく話す」つまり「適切に、説得的に語る人」を含意する。
- (80) 「何か善い神性」は *numen aliquid bonum* の訳語。
- (81) 原文はギリシア語。白鳥が死に際して歌うという考えはアイスキュロスの『アガメムロン』1445にすでに見いだされる。
- (82) キケロ『老年について』中務哲郎訳、岩波「キケロ著作集」九、五七―五八頁の訳文による。
- (83) マルクス・ポリキウス・カトーはローマの監察官であった。彼は『老年について』の中で語っている人物であり、そこでは八三歳である。話し相手の若者はプブリウス・アフリカヌスとガイウス・アエリウスである。
- (84) ラテン語の *decorum* (デコールム) は「適正、均整美」と訳される徳性である。ここでは文脈上「礼節」と訳した。この徳性に関してはキケロ『義務について』第一卷二七章を参照。
- (85) カトーは紀元前一四九年に亡くなっており、キケロの『老年について』は紀元前四四年に書き上げられている。
- (86) 「陣営」(*praesidium*) はキケロの『老年について』2073でも使われている。「牢獄」と同じ意味でも内容が異なる。
- (87) 「兵役」についてヨブ七・一、Iテモテ一・一八また「戦闘」について同六・一一、IIテモテ四・七参照。
- (88) プラトンの著作に該当する箇所はないが、それを示唆するものとして『パイドン』またクセノフォンの著作がある。
- (89) 「初めと終り」は直訳すると「船首と船尾」であつて、儀式の濫用について用いられた慣用語である。これに関しては『格言集』118を参照。
- (90) このように幼児洗礼を受けた者が信仰告白する儀式は堅信礼と呼ばれている。
- (91) 「豊饒の角」というのは花や果物を盛ったヤギの角、雌アギマルティアの角から富が無尽蔵に湧出するというギリシア神話に由来する。
- (92) 使徒言行録九・四三参照。

- (93) 「テント製造人」とあるのは原文では「靴直し人」(shoer)であって「靴直し専門人」という軽蔑された表現であるが、使徒言行録一八・三に従ってそう訳した。
- (94) フィリピ四・一二参照。
- (95) カンタベリイの大聖堂の中には聖遺物を納めた筐があつて、そこには聖トマスの遺物が保存されている。中世には多くの巡礼者が遠隔の地から訪れた。
- (96) プラトンが『メノン』においてメノンの奴隷に数学を想起によつて解答させた情景がここにはあつて、数学者が杖を使つて砂の上に図形を描きながら証明させている。
- (97) テサロニケⅡ三・八、一一、一二参照。
- (98) ミニチュ版『ギリシア教父全集』58, 545.
- (99) 「メンフィティクスのペン」とはエジプトのペンまたは葦のペンを言う。
- (100) 箴言一・五、九・九参照。
- (101) 「テオフィウス」という名前は「神に恵まれた者」を意味する。
- (102) 「多作家」はギリシア語 πολυγράφοςが使われている。
- (103) マタイ一四・六
- (104) ルカ一六・一ff
- (105) ルカ一六・二〇ff
- (106) 紀元前四世紀に活躍した古代最大の画家。エラスムス Parabolae, CWE23, 220, 228; 244; 276 参照。
- (107) エラスムス『格言集』I, 6, 87 キケロ『老年についで』14, 49 参照。
- (108) したがつて一つの小部屋からは果樹園と鶏小屋が、他方からは牧場と小さな建物とが見える。
- (109) バシリクスとは鶏の鶏冠と体、蛇の尾をもつ伝説中の動物で、吐く息またはひとにらみで人を殺したというものをいう。
- (110) 「めでたしめでたし」と訳した原文はギリシア語 εὐτυχία (戦勝祝い)が使われている。
- (111) デリアというのはデロスの女の意味で、イタリアの古い女神にして狩りの女神であるダイアナを指す。

エラスムス全集の省略記号

- Desiderii Erasmi Roterodami Opera Omnia, editi J. Clericus, 10Bde., Leiden 1703-6 = LB
Erasmi Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterodami recognita et adnotatione critica instructa notisque illustrata, Amsterdam
1969ff = ASD
The Collected works of Erasmus, Toronto 1974 = CWE

「敬虔な午餐会」の解説

金子晴勇

『対話集』はエラスムスの生涯にわたって拡大されていったが、「敬虔な午餐会」という作品は一五二二年版にはじめて加えられた。しかし、それはこの対話の一部分に過ぎなかった。だが、その後にならぬ改訂が加えられて同年の八月か夏頃に完成版が出版された。

この対話編の魅力は少なからずそのセッティングにあるように思われる。この対話では多くの友人たちが都市の郊外にある、よく設計された美しい庭のある家に集まったことが述べられている。ルネサンス時代にはこうした家と庭園での生活が対話的な作品の背景として一般に設定されていた。古典的な例としてはホラティウスのサビーネの農場とかキケロのトスクラムにあつた別荘などが有名である。こうした文学における事例をエラスムスがよく知っていたが、現実にもそういう庭園を知っており、イギリスの友人たちもそうした庭園を建設する計画をもっていたようである。たとえばチェルセアにあつたトマス・モアーの家は一五二三年になつてから購入されたし、コレットは引退後にリッチモンド近郊のシエーンのカルトジオ会修道院に山小屋を立てる計画を進めていた。実際の別荘と庭園に関しては、エラスムスがよく逗留したバーゼルには、印刷業者フローベンの庭園があつて、そこではバーゼルとその近郊に住む何人かの人たちが常集つていたと想定してもよいであろう。というのは一五二二年にはバーゼルにおけるヒューマニストたちは未

だ分裂していなかったからである。

この対話編で描かれているエウセビオスの家の内部は、ある点で、エラスムスの友人でコンスタンツの大聖堂付き参事会員ポツハイムのヨーハンのものとよく似ている。エラスムスはそこを一五二二年の一〇月に訪ねて客となつてゐる。翌年の手紙でこの家をよく整つた優雅で表情に富む、学芸の神の住まいと呼んでいる。エラスムスとヨーハンは氣質と趣味とが似ていたと言えよう。

この対話は芸術的な力量においてもエラスムスの卓越した才能と訴える力を發揮している。彼は対話の巨匠であつて、対話をとおして多様な思想を表現し、その性格によつて諸々の意見を示唆し展開させる。この対話の冒頭は客人とともに読者を気楽にくつろがせるような書き出しとなつてゐる。心から歓迎を受けたのちに客人たちは家や庭を見て回る見物に加わる。それから昼食のご馳走のもてないしを受け、その間に暇に任せて重要で、ときには深遠な主題について討論する。その後彼らは意味深いおみやげをもらい、お屋敷の他のところを見せてもらつてから、解散する。対話の全体をとおして真に迫つた統一性と一貫性が見られ、そこには他の対話に見られるような揶揄・冗談・諷刺といったエラスムス的なルネサンス特有の特質が見られない。対話にはプラトンやキケロの対話編を偲ばせるような文学的な卓越性が認められるばかりか、古典文化とキリスト教との統合というヨーロッパ的な主題が見事に展開する。それこそエラスムスにおいて開花したキリスト教的ヒューマニズムの精神である。しかもその統一は単なる二文化を折衷するような混合ではない。宗教こそ彼の主たる関心事であつて、キリストが目には見えないが主賓となつてゐる。こうして午餐会はキリストの聖なる晩餐を想起させるものとなつた。

事実、この長大な対話編においては古典文化とキリスト教信仰の關係が追求されている。世俗の作家と聖書の間に絶対的な対立はない。果たして人間に由来する言葉とキリスト教の言葉との間には違いがあるか。そこで客人の一人が聖パウロの言葉の意味について永いこと会話を交わした後に、世俗の作家から語句を引用した。それは大カトーの次の

言葉であつた。「また、生きてきたことに不満を覚えるものでもない。無駄に生まれてきたと考えずに済むような生き方をしてきたからな。そしてわしは、わが家からではなく旅の宿から立ち去るようにこの世を去る。自然はわれわれに、住みつくためではなく仮の宿りのために旅籠を下さつたのだから。魂たちの寄り集う彼の神聖な集まりへと旅立つ日の、そしてこの喧騒と汚濁おじよの世から立ち去る日の、何と晴れやかなことか。これに付け加えて言う、「キリスト教徒たるものはこれに優つて敬虔に何を言うことができようか」と。もう一人の客人はこれに続けて、どれほど多くのキリスト教徒がこういう仕方生きて来ており、この言葉を口にする権利をもっているのか、と質問する。すると三番目の客人が次のソクラテスの言葉をその発言に加える。「人間の魂は身体の中に陣営にいるように置かれており、最高指揮官の命令なしにはそこを立ち去るべきではないし、その部署につかせたお方によしと思われるよりも長くそこに滞在すべきではない」と。このことはこの身体を幕屋と呼んだパウロやペトロの言葉に完全に一致している。そこで次のように語られる。「キリストがわたしたちに求めていることは、他でもないすぐにでも死ぬかのようにわたしたちが生き、かつ、目覚め、いつまでも生きるかのように善きわざに励まねばならないということではないでしょうか。あの栄光に輝く日よ、という声を聞くときには、もうパウロ自身が〈この世を去つてキリストとともにいたいと熱望する〉（フィリ一・二三）と語っているのを聞くように思われませんか」⁽³⁾。

エラスムスはこれに対し、わたしたちはキリスト者にふさわしくないカトーの言葉にある種の自己確信を見つけ出すことができるとしても、毒人参を飲む前にソクラテスが何と言つたかを聞くべきであると言う。彼が行なつたことを神が承認してくださるかどうかわからないが、確かに彼は神に喜ばれようと努力してきたし、神がこれを聞きとけて下さるよう願っていた。これに対しエラスムスは「このことにまして、正しいキリスト教的な人間にいつそうふさわしく一致するものを、異教徒の間ではかつて読んだことがない」と付言する。すると客人の一人が即座に次のように応答する。「それは確かにキリストも聖書も知らなかつた人における賛嘆すべき精神です。ですから、わたしはそ

のような人についてそうしたことを読むときには、聖なるソクラテスよ、わたしたちのために祈ってください (Sanctus Socrates, ora pro nobis)、「と、どうしても言わざるをえません⁽⁴⁾」と。

この箇所は多くのことをわたしたちに告げている。それはエラスムスが信仰と文化との、つまり古典的な古代に対する深い感嘆とキリストによって捉えられたこととの間に見いだした総合を的確に示している。両の比較の尺度はキリスト教信仰であり、これによって彼は古代世界の英雄たちを測っている。このことは一巡りして他の仕方でもしばしば提示された。キリスト教と古代とは同等な権利をもって相互に併存すると、あるいはキリスト教は異教的な内容の再形成にすぎないと、言われた。この対話はそのような関係を別の仕方でも示している。会話は全体としては聖書の章節とキリスト教信仰を扱っている。会話の中にこのような部分をエラスムスは有機的に挿入した。一方においてカトーとソクラテスの間には相違があり、他方において聖書の意見との間にも相違があるが、それらは絶対的な差異ではない。この点についてエラスムスは『エンキリディオーン』⁽⁵⁾では明瞭に「どこで真理を発見しようと、それをキリストに帰しなさい」とキリスト教の立場に立つて主張していた。異教徒をキリスト教徒にすることなしに、神に関する何かが人間の言葉を通して到来する。強調点はむしろ神の霊の活動にあつて、それは一般に理解されるよりも広く捉えられている。この議論のはじまるところで最初の語り手は世俗の作家を引用することに関して弁明すると、饗宴の主人は次のように言う。

「敬虔であつて良い道徳に役立つものはすべて世俗的であると呼ばれるべきではありません。もちろん聖書はどんな場合でも第一の権威にふさわしい。しかし、わたしはときどき古典の作家たちによつて語られたものに、あるいは異邦人の書物に、また詩人たちの書物にさえ出会います。それらがとても高潔で、信心深く、素晴らしいので、彼らがそれらを書くときに、何か善い神性が彼らの心を突き動かしていると信じないわけにはいきません。恐らくわたしたちが認めるよりも広範囲にキリストの霊が注がれているでしょう。わたしたちの名簿には含まれていない多くの人たちが聖徒の仲間にはいるのです」⁽⁶⁾。

この最後の言葉は先に引用した「聖なるソクラテスよ、わたしたちのために祈りください」と同じ方向を示している。それはエラスムスの上品で率直な性格をよく表わす表現である。この有名な一句は、「聖母マリアよ、われらがために祈りたまえ」という祈祷の一句をもじったものであるが、異教時代の哲学者ソクラテスに祈りを捧げるエラスムスの無信仰、古代への心酔の証拠として、しばしば問題にされたことがある。しかしエラスムスの真意は、まったく別なところにあった。

次にこの対話編で重要な思想はキリスト教的な自由に関する主張である。食事を始めようと座席に着いたときに聖書の箴言が朗読されたが、そこにはキリスト教的な自由が述べられており、対話編の精神的な中核が示されている。「水の分流のように、王の心は主なる神の手のうちにあり、主が欲するところへこれを向けたもう。人の歩む道はすべて自分には正しいと思われる。しかし、主は人の心を吟味したもう。あわれみを施し、正しい判決をなすことは犠牲を捧げることよりも主に嘉せられる」(箴言一一・一―三)⁽⁷⁾。これは内面的で靈的な自由であって、慣習や政治的な拘束と対立させられる。それは実に王者的な自由であって、次のように解説されている。

「そこに〈王〉とあるのは完全な人間とみなされることができ、その人は肉の情念を抑制して、ただ神の御霊の力によつてのみ導かれています。さらに、このような人を人間の法によつて規制しようと強いることは不適当なことであり、彼は自分の主——その御霊によつて彼は動かされているのですが——に委ねるべきです。彼は、それによつて不完全な人々の弱さがともかくも真の敬虔へと前進していくようなものによつて、判断されるべきではありません。しかし、もし彼が悪しきやり方で事を為す場合、パウロとともに次のように言わなければなりません。〈主は彼を受け入れて下さった。彼が立つのも倒れるのもその主による〉(ロマ書一四・三―四)と。また同様に〈霊の人はすべてのことを判断するが、自分自身は誰によつても判断されない〉(一コリント二・一五)。したがって誰もこのような人に命令することはできませんが、海と川の行き先を定められた主は御自身の王の心をその手のうちに収めておられ、望むところ

へはどこへでもそれを向けます。そこで、人間の法が果たすよりもより良きことを自発的に為す人に命令したりすることが必要でしょうか。あるいはまた、神の御霊の息によつて支配されていることが確かな証拠によつて明かであるような人を、規則によつて拘束することはどれほど無思慮なことでしょうか。⁽⁸⁾

これをルターの『キリスト者の自由』と比較するとその特質が明らかになるように思われる。ほぼ同時に提起された「キリスト教的な自由」に関する宗教改革者とヒューマンニストの相違はどこに求められるであろうか。ルターの書物が当時の最高権威者である教皇レオ十世に献呈されており、教義の改革をとおして改革を目ざしているのに対して、エラスムスの友人たちは古典によつて教育されており、その精神、とくにソクラテスの精神を新時代に生かそうと試みるのであるが、それでも聖書の指針に忠実であつて、キリスト教的な敬虔な精神をもつて聖書の共通な理解に達しようと務めている。彼らは聖職者ではなく、平信徒であり、その認識は明瞭でなくおぼろであつても豊かな霊的な生活を目ざしている。

二宮敬氏はこの点を次のように言う。「なるほど『対話集』のエラスムスは、以前のように、キリストの苦悩を自ら担えとはもはや呼びかけない。しかしそれは、彼がキリストを否認したからではない。寛容と話し合いとを訴え続ける彼の意に反して、ローマ公会と宗教改革派とが日増しに鋭く対立し、異端者と殉教者とが機械的に生み出されていったこの時期において、特に必要なものは理性的判断であり深い自己省察である、と彼は考えたからである。ソクラテースの異教の叡智は、我を忘れたキリスト教徒の狂信よりもキリスト教的だと、思われたからである」⁽⁹⁾と。

この対話編の中にはエラスムスの宗教改革における聖書を重んじる基本的姿勢、それに伴われた論争の実体、平信徒の役割、キリスト教的な敬虔の内実、古典文化とキリスト教の総合などが見事に説かれていると思われる。

注

- (1) Allen, Ep. 1342, 336-54; CWE Ep. 1342, 372-90
- (2) Erasmus, Colloquia ASD I-3 251: 610-254; 712 Thompson Colloquies 65-8
- (3) 本文の訳一二五頁〜一二七頁。
- (4) 本文一二八頁。
- (5) Erasmus, Enchiridion LB V 9D-E
- (6) 本文一二四頁。
- (7) 本文一一〇頁。
- (8) 本文一一三頁。
- (9) 二宮敬「解説」『平和の訴え』岩波文庫、二八二頁。

(本稿は二〇〇一年度と二〇〇七年度の「ヨーロッパ文化学」A演習一において二年間にわたって講読したものである。)